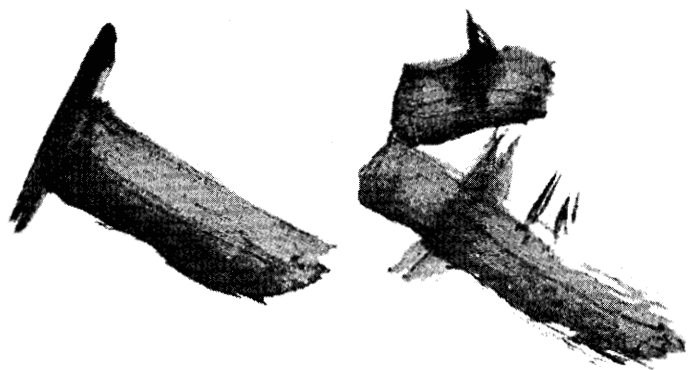


Title	人文 第53号
Author(s)	
Citation	人文 (2006), 53: 1-66
Issue Date	2006-06-30
URL	http://hdl.handle.net/2433/57179
Right	
Type	Article
Textversion	publisher



第五三号



2006

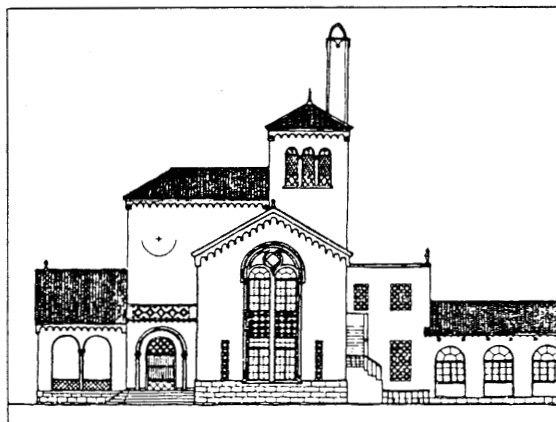
京都大学人文科学研究所

ISSN 0389-147X

人 文 第五三号

2005年4月—2006年3月

も く じ



随想

（私の）名前、日本の就学前教育と子供の力

イヤル・ベン・アリ 田中雅一・金谷美和訳
韓国の古文書と女性の地位 …… 安承俊 金文京・李昇燁訳

講演

夏期公開講座 古都イメージの近代と現実

京都史の文法（小林文広）／近代京都名勝考——京都の森
林風致——（丸山宏）／近代京都と国風文化・安土桃山文化
（高木博志）／都市の計画と京都の自己イメージの特徴…
明治・大正・昭和の三断面を通して（伊從勉）

開所記念講演

界面としてのキャラクター（守岡知彦）／ピアニストに
なりた！——練習曲の思想と一九世紀（岡田暁生）／雲岡
石窟寺の考古学研究（岡村秀典）

退職記念講演

詩を読む・語る・訳す（宇佐美齊）

彙報

共同研究の話題

この字、なんの字、気になる字。
アジア・ネットワークの研究

「啓蒙」を求めて

複雑系としての仏教漢文

所のうち・そと

つまらなかつたNHK「新シルクロード」

小中学校教員を養成すること

晴れた日の朝には自転車で

二〇〇三年春 北京にて

奨励賞を受けて

書いたもの一覧

1

10 10

19

23

25

39

45

53

井波 陵一

籠谷 直人

田中祐理子

船山 徹

富谷 至

岩城 卓二

王寺 賢太

古松 崇志

原田 禹雄

(私の) 名前、日本の就学前教育と 子供の力

イヤル・ベン・アリ

(田中雅一・金谷美和訳)

過去二十年間、私は京都の中心に位置する保育園の調査を行ってきた。一九八八年と一九九四年の夏に桂保育園のフィールドワークを行い、さらに再び二〇〇五年九月と二〇〇六年二月に京都大学の近くにある朱い実保育園で調査を行った。私は、ここで前者での経験に戻ってみたいと思う。というのも、そこで私は、子供、特に日本の子供の力についてあることを学んだからである。

私の名前はつねに問題を引き起こした。五十年ほど前、私の両親はイスラエルに移住し、私が一年後に生まれたときに、両親は私に近代的なヘブライ語の名前をつけることに決めた。イヤルとは、「力」というような意味を持ち、一方でベン・アリとは「ライオンの息子」という意味を持つ。私の名前は、伝統を生み出しその存在を守ろうとしている新しい国で育つ子供には、確かにぴったりの名前である。しかし、世界を旅し、ヘブ

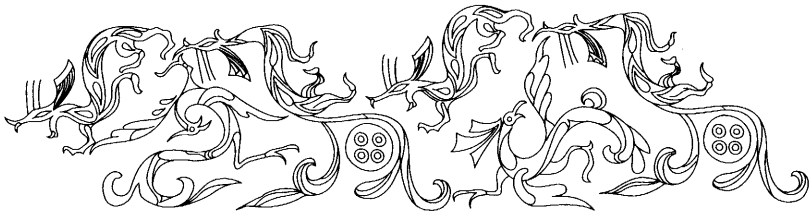


ライ語以外の言語で話す人々と接触する者にとっては、好都合な名前とはいいたい。

一九八八年にフィールドワークを行ったときに、私の日本人の友人は、私がベンアリと名乗ることで、ものごとをより簡単にするようにと親切にも勧めてくれた。そこで、桂保育園では、私はベンアリ先生、ベン先生、あるいはアリ先生として知られるようになった。これが、私の名前がこう変わった変形の始まりだった。この変形の始まりは私の身体のサイズに関わっていた。私の身体的サイズは、控えめに言っても日本の保育園教員の平均よりひとまわりかふたまわり大きかった（私は身長一九〇センチ、体重一〇〇キロ以上の重さで、脳と筋肉、それから、そう、脂肪からなる体格をしている）。私が到着して一週間か二週間後、ひとりの三歳の男の子が私の隣に立った。彼は私を見上げて、眼を輝かせながら、次のようなことを言った。

アリは蟻、蟻は小さな生き物。それなのに、どうやったらこんなに大きな先生が、蟻のように小さなものの先生になれるんだろう。どうやって蟻の先生になったの？

後に、子供たちが私になじむにつれて、子供たちは私の名前の「ベン」でふざけるようになった。私は子供たちに「勉強の先生」と呼ばれたり、「お弁当の先生」と呼ばれるのはちっとも構わなかった。が、もちろん、「ベン」の一番はつきりした



連想は、(そのときは予想していなかったのだが)、トイレと排出物だった。私はすぐに「便所の先生」というあだ名をつけた。あたかもこれだけでは不十分だったかのように、時々私は「うんちの先生」、「うんこの先生」と呼ばれたし、「おしっこの先生」とまでも呼ばれた。しかし、それからさらなる展開が生じた。同僚の先生と一緒にいると、子供たちが私たちの傍を通り抜け、私の「名前」のひとつをささやくということがしばしば生じたのである。私の隣に立っていた先生は、幾分戸惑った沈黙を持つて微笑み、それから子供たちはその効果に満足して走り去るのであった。

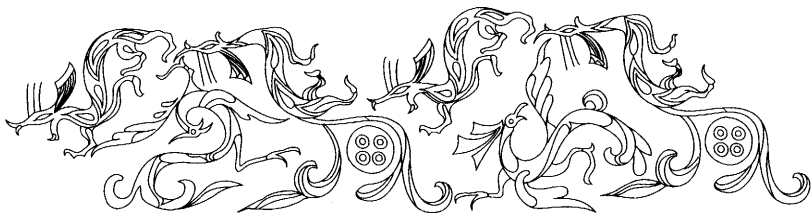
私はこれらのエピソードがすぐおもしろいことに気付き、その意味を自問した。これらは私自身についての問題ではなかった。というのは、私はあまりマツチョではなく、そのような名前を気にしなかったからである。むしろこうしたからかいが、保育園について何かを私に教えてくれるということに気付いた。まず最初に私がしたことは、このような行為と似た他の事例をフィールドノートの中から見つけることであった。最初に私が見つけたのは、大人を「おかしな」あるいは「かわいい」とみなすであろうエピソードであった。たとえば、プールに入っていた小さな女の子が水の入ったコップをもって、「男はビール」というテレビコマーションのマネを真剣にしたという事例。しかし私は、名前についてのからかいは異なった種類の行為と似ていると感じた。それは例えば、昼食中、箸を飛行機に見



立てたり、バスケットを自動車に見立てたりすることである。別の事例をあげよう。一日の最後に四歳児の子供たちが帰りの支度をしている時に、先生が弾く小さなオルガンの伴奏にあわせて、みんなが「さよなら」というよく知られた歌を歌い始めた。歌の半分あたりのところで、三、四人の子供たちが、音程をはずして、歌詞を過度に強調しながら歌い始めた。仲間たちからいくぶん賞賛の反応を受けて、子供たちは数分間「わざとらしくおおげさに」続けた。他の機会では、六歳の女の子が床を掃いているときに、その子の進む方向に先生と私が立っているのを見つけた。その子は私たちの足を掃いて、言った。「あれ、ここに大型ごみがある！」

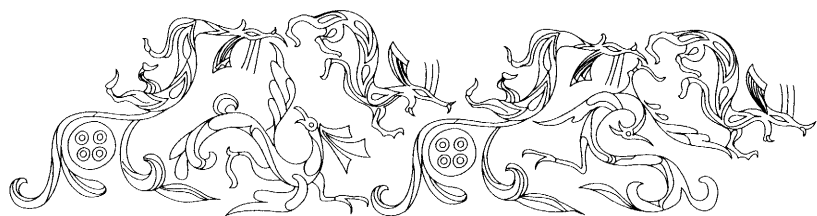
最後に紹介したいのは、先生の「自己」と遊ぶことを伴う行為である。それは、先生の服をひっぱったり、エプロンの後のひもをほどこいたり、トイレにまで先生の後をついて行つて、「おしっこ、おしっこ」と叫んだり、先生の後ろに座つて「お尻見はった」と言うことである。

このような行為は、明らかに想像力に富んではいるが、しかしそれは絵画、ダンス、語り聞かせのような、創造性を育てるためにデザインされた形式的な教科過程の意味においてではない。むしろ、このような創造的な行為は、他の行為に伴つて現れてくるように見える。そのような行為は、先生たちからは厄介なこととみなされたり、少なくとも、そのような行為が現れる状況のなかでは重要でないこととみなされたりしがちである。



しかし、子供たちの自立のひとつの側面は、大人たちの世界に挑戦することである。子供たちの知識は、大人たちが「明白な」あるいは「誰にでも知られている」と主張することとはしばしば矛盾する。このために、子供たちはつねに政治的な問題である。もし私たちがこの点を理解するなら、社会化とは一般に想像されているよりもはるかに不確定な過程なのだということを正しく評価するだろう。社会化とは、助け、導き、保育するといった一方向的な関係にあるのではなく、むしろ、そこに参加する者たちとの双方向的な過程、ときに葛藤関係にある過程である。現代日本の初期教育についての多くの西洋の研究との関係で言えば、これらの点は、特に重要である。

名前に関わるからかいやそれと関係する行為は、目的指向の活動や、先生や専門家のつくった行動計画には反するものとして位置する。おおげさに歌を歌うことや、おにぎりを爆弾に見立てることは、明らかに決められたルールや約束ごとに反対して行われる事例である。子供についての多くの学術研究の問題は、子供とは比較的受け身で、未熟で、依存しているという仮説から未だに出発していることである。子供たちを、彼らが生きている状況に対して、少なくとも抵抗したり変化を加えたりするような力をもつ政治的アクターとして扱うことは有益であるということをお示唆したい。このようなモデルは、取引すること、連立を築くこと、弱者の力、集会的なゴール、党派を伴うこと、指導力の実践を下稽古することを、子供に関わる問



題として検討することを助けてくれるであろう。

私が觀察した批評、皮肉、卑猥さ、からかいは、日本の子供についてのある種の（おそらく西洋の）学術的概念を侵犯するだろうが、そのまったくの偏在性とダイナミズムは、子供たちが人生と関わっている方法のまさに中心に位置しているということを強調している。人類学の視点から見ると、先生や教育者たち（そして彼らが依拠している「熟達者」たちのほとんどは）、仕事でないもの、本当でないもの、まじめでないもの、生産的でないもの、貢献しないもの、といった——でないもの、という言葉で、それらの遊びに満ちた行為を捉えがちである。対照的に、私の議論では、就学前の経験として、このような気紛れで探求的な行為を、形式的な組織化されたヒエラルキー、分業、カリキュラムなどと同じくらい重要なものとして捉えるべきなのである。これらの行為は、子供の創造的で探求的な性質を強調しているのである。



韓国の古文書と女性の地位

安 承 俊

(金文京・李昇燁訳)

近代以前の東アジア世界は、儒教の影響による男尊女卑の社会で、男性の圧制のもと女性は基本的人権さえも認められていなかったと考える人が多いであろう。特に儒教の力が社会の隅々まで行き渡っていた韓国では、この傾向が強いと思われるが、ちである。しかし少なくとも十七世紀以前の韓国において、女性には男性に劣らぬ権利を実はもっていた。そのことは、この時代の古文書からうかがえる結婚の形態と財産分与の方法に、もつともよく現れている。

韓国では今でも女性が結婚することを「媿家（夫の家）に行く」、男が結婚することを「丈家（妻の家）に入る」とふつうに言う。前者は、結婚後、妻が夫の家に入る現代の習俗に合致しているが、後者はそうではない。これは昔の習慣が言葉にだけ残ったもので、十七世紀以前では「男婦女家」といって、男は結婚後、妻の家で暮らすのがふつうであった。いわゆる婿入り婚である。このような習慣は、平安時代以前の日本と同じで



あるが、韓国ではそれが日本よりずっと長く続いたことは、案外知られていないであろう。またこの場合、婿は妻の父母をそのまま父母と呼び（現在では丈人、丈母と言う）、妻の兄弟と同じ息子としての待遇を受けるが、しかしなんと言っても妻あつての婿であり、女性の地位は相対的に高かつたのである。

女性の地位が高かつたなによりの証拠は、妻が夫とは別に独立した財産をもつていたことであろう。妻の財産の由来は、おもに実家からの贈与と遺産相続である。東アジアにおける相続制度について、日本は長子相続、また中国は男子のみの均分相続が原則であつたと一般的に言われている。これに対して十七世紀以前の韓国では、男女を問わず、すべての子供に財産が均分相続された点に特色がある。この子供一人ずつの遺産の分け前を当時の文書では「衿」といい、均分相続は「衿給」と表現された。通常、子供は男女とも、まず結婚した時に父母から奴婢を含む一定の財産を分与され、次に父母の死亡にともない、その遺産を均分に相続するのであるが、この場合、父と母から別々に相続が行われるのである。母は父とは別に財産をもっているからである。この点から考えると、十七世紀以前の韓国女性、日本や中国にくらべてもはるかに高い経済的独立性をもつていたと言えるであろう。

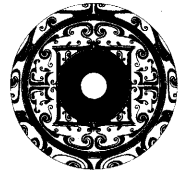
韓国と日本、中国の古文書を比較してみると、同じ儒教文化圏でありながら、三国の社会、経済の仕組みには大きな相違があることが浮き彫りにされる。私は韓国の古文書の調査・研究



を仕事としているが、この度、約十ヶ月、人文研に滞在する間に、日本と中国の古文書の実際に触れ、また研究者と交流する機会を得たことは、私にとって大きな収穫であった。今後は、東アジアの古文書を全体的に比較する視野の中で、韓国の古文書の性格を考えてみたいと思っている。



講演



夏期公開講座

「古都イメージの近代と現実」

京都史の文法

小林 丈 広

京都市内中心部に、祇園祭の際に南観音山という山鉾を出すことで知られる百足屋町という町がある。この町では昨年、町の姿や生活、行事の様子などを美麗な写真集としてまとめ、さらに別冊として、平安京以

来の百足屋町の詳しい歴史を作成した（『百足屋町史』）。

また、京都郊外の山科村竹鼻というところに住む旧家の当主は、地域に伝わる古文書を解読して、一九八六年に村の歴史を一冊の本としてまとめ、さらに二年程前に、村の景観の変化を地図でたどる冊子を発行した（『山科郷竹ヶ鼻村史』など）。

このように地域の歴史を自らが記述する試みは各地で行われており、京都でも行政区や学区、町村単位、家単位のものまで含めると毎年のように多くの歴史叙述が生産されていると思われる。ここでは、なかでも質量共に充実した両書を例として取り上げながら、歴史学の現場について考えてみたい。このうち、百足屋町史の場合には、町並みと景観を守るための町民の運動が町史編纂の動機のひとつになっており、編纂体制も町を挙げて取り組まれたようである。それに対して、竹ヶ鼻村史の場合には、失われつつある村の共同意識や自然に対する郷愁を背景としており、編纂者が個人として私財を投じて作成したものと思われる。このように編纂の動機も体制も区々で、対象とする地域も古くから都市化の進んだ町と、近年急速に住宅が増えてきた農村部というようにその性格も異なっているにもかかわらず、両書における歴史のとらえ方は、平安京

と地域との関係についての関心、中世以来の地域住民の自治意識の強調、江戸時代の地域運営についての実証的な分析、明治維新による地域社会の変容に対する着目など、共通点が非常に多い。

興味深いのは、両書共に当該町村に深くこだわり、その個性や特徴に着目しながら、その一方で、地域の歩みを持つ普遍性を強調し、それぞれの地域の全国史的な意味に関心を向けているところである。それが、両書の構成が似通っている理由のひとつであろう。また、編者自身の個人的な思いなどについては極力触れず、あくまでも地域の歩みを客観的にとらえることに努め、史料が残っているものについてはできる限り具体的に言及するなど、歴史叙述を地域の公共的な事業として非常に重視していることもうかがえる。こうして見ると、両書は、戦後歴史学が形成してきた「京都史の文法」に則って記述されたものであることがよくわかる。両書に見られる史料を重視する姿勢も、同じ文脈でとらえることができるであろう。

付記

本講座では、こうした問題について「私的記憶」と「社会の記憶」「共同体の記憶」「公共の記憶」「公的記憶」などとの関係、すなわち「記憶論」の文脈でとら

えてみた。当日の講座テーマも、「京都における「公的記憶」と「公共の記憶」というものであったが、小文においてはその一部の紹介にとどめ、タイトルもそれに即したものに改めたことをお断りしておく。

近代京都名勝考

— 京都の森林風致 —

丸 山 宏

京都周辺の森林は明治維新以前、いわゆる「社寺林」に属しているものが大半であった。大社名刹は背後に社寺林をもち、社寺林は境内地に属していた。京都の社寺を中心とする多くの「名勝地」の存在はこの社寺林なくしては考えられない。

ところが地租改正という近代的所有制移行の過程で、社寺林は明治四年一月に官有林として土地され、さらに明治八年六月には「祭典法用ニ必需ノ場所」以外は再度、厳しく土地された（引き裂き土地）。その結果、社寺林の維持管理が滞ることになる。土地以前の森林は各社寺によって周辺の農民に入会林的な利用権を付与する代わりに森林の管理をさせる維持管理システムがあった。

社寺林の林相を見ると植林と見られるヒノキ林もあるが、多くがアカマツを主体とする植生で、いわゆる里山の景観である。このアカマツ林が京都の原風景と

して取り上げられるが、実はアカマツ林というのは自然と人間の収奪の微妙なバランスの上に成り立っている。森林から建築材、燃料、肥料を収奪することにより、アカマツ林が維持され、結果として成立したアカマツ林が京都の原風景を作り出したのである。今日では経済林としての価値が無くなり、また、農用林としても利用されることはなく、放置された森林は自然の遷移に従って、照葉樹林へと変化し、アカマツ林が減少している。

京都市は明治期に、経済的な復興を目指し、琵琶湖疏水をはじめ様々な施策を行ったが、この「名勝地」もその射程に入れる。北垣国道知事（市長兼務）は明治二三年二月に施政方針を述べ、「京都ノ名勝地ハ市ノ経済ニ関スル事龐大ナリ内外人ノ此地ニ輻輳スルノ原因ハ社寺名勝地ノ存在スルニ由ル者多シ是京都固有ノ財宝ナリ」と名勝地保存の重要性を強調している。

明治二八年五月に府議会でも名勝地保護のため「公園地」として府への移管を国に上申している。この時期、国としての森林政策にはまだ確たるものがなかった。

林野行政が体系的な形で整備されるのは、明治三〇年四月の森林法と明治三二年三月の国有林野法である。森林法により民有林に「保安林」が規定された。第八條の第九項に「社寺、名所又ハ旧蹟ノ風致ニ必要ナル

箇所」と、社寺林も保安林に編入することによりその風致を維持することが可能となった。

ついで、大正八年四月の都市計画法による「風致地区」があるが、京都は昭和五年二月に風致地区を設定した。「山地部」は約六六〇〇ヘクタール、風致地区の八二パーセント強にあたる。京都の風致政策の先進性には、歴史的に多くの社寺林を持つ京都の潜在性が見て取れるのではないか。

さて、今日的な問題として、京都の財産であるかつての「社寺林」をどのように維持管理していくかは依然として残されている。

一九九四年一二月、古都京都の文化財一七ヶ所（宇治市、大津市を含む）が世界遺産に登録された。賀茂別雷神社（上賀茂神社）、賀茂御祖神社（下鴨神社）、教王護国寺（東寺）、清水寺、延暦寺（大津市）、醍醐寺、仁和寺、平等院「宇治市」、宇治上神社「宇治市」、高山寺、西芳寺（苔寺）、天竜寺、鹿苑寺（金閣寺）、慈照寺（銀閣寺）、竜安寺、本願寺（西本願寺）、二条城の一七ヶ所である。これらの世界遺産のバッファ―に「社寺林」がある。今後、その維持管理には古都京都の景観問題とも関連し、国民的議論が惹起される必然性があるのではないだろうか。

近代京都と

国風文化・安土桃山文化

高木博志

近代の京都には、雅と町衆という大きく二つのイメージがある。これらは「国風文化」と「安土桃山文化」につながるが、そのイメージの形成過程を考えた

い。

飛鳥時代から江戸時代にいたる日本の文化の流れを時代区分する見方は、岡倉天心の「日本美術史」講義を契機に一八九〇年代に成立し、古都奈良は古代に特化される。そして古都京都において、国民国家形成期の一八九〇年代には、平安遷都千百年記念祭が祝われ、固有な日本文化の源泉として「国風文化」が重んじられた。一九一〇年代以降の「帝国」の時代には、「海外発展」の先達としての豊臣秀吉やキリシタンの南蛮文化が顕彰され、また庶民文化の台頭などを近代につながる「文化的資質」とみなし「安土桃山文化」が注目された。光彩を放った二つの時代は、中国やヨーロッパにはない日本「固有な」文化とみなされ、京都は

自らをそのイメージに重ねてゆく。その後、前者は一九三〇年代に源氏物語研究で雅な側面が強調され、後者は高度成長期の林屋辰三郎らによる町衆の市民文化にいたる。祭でいえば雅な葵祭と町衆の祇園祭とにそれぞれが対応する。

こうした京都イメージの近代を通じた形成と並行に、京都自体が「文化財化」してゆく。そして「古都」という言葉が一般化する一九六六年の古都保存法を経て、一九九四年の古都京都の文化財として世界遺産指定に至るのである。

この「文化財化」の問題を名所で考えてみたい。たとえば江戸初期の名所図会『京童』（一六五八年）の東寺を象徴する大師堂は、東寺境内西側にあり、室町時代以降、弘法大師信仰の中心であった。それが一八九〇年代以降、美術的な価値で東寺を評価すると、平安前期の密教美術の粹、端正な帝釈天像などを擁する講堂の立体曼陀羅が、今日につながる東寺イメージとなってくる。同じことが、国風文化の象徴、平等院鳳凰堂でもいえる。近世の鳳凰堂は、宇治川の「橋合戦」、『平家物語』の世界にあり、頼政が自刃した扇の芝は観光スポットであった。しかし一八九〇年代以降には平安時代後期の「国風文化」と位置づけられ、一八九三年のシカゴ博覧会の日本パビリオン「鳳凰殿」

の意匠となり、ピュアな日本文化を代表する。一九一一年十月、奈良女子高等師範学校の修学旅行では、頼政の画像や「宇治川合戦の遺物、薙刀、鎧、鞍、弓」とともに、優秀な「藤原氏時代」の鳳凰堂や定朝の阿弥陀如来を鑑賞するが、彼女たちには江戸期の軍記物の世界から近代の美術的なものの見方へと価値観が重層していた。

「古典文学」などの物語や伝説とともにあった、前近代の名所などの景観、仏像・絵画などのモノといった総体が、美術的な価値と重なりつつ近現代に変容してゆくありようを捉えなければならない。

都市の計画と

京都の自己イメージの特徴

…明治・大正・昭和の三断面を通して

伊 從 勉

都市を人間に例えると、都市の改造や計画という一種の治療行為は、都市の「身体的」病弊の治療や外科手術の意味にのみ受け取られ勝ちである。都市の組織には過去から現在に引き継がれる集合記憶や感情という心の働きが結びついているから、身体を物理的に改変すると、必然的に「心の不調」を引き起こす。絶えず身体をいじくっている都市という患者は、したがって、常に心を病んでいることになる。近代京都の心の病をここでは考えてみたい。

例えば、時代時代に流行った都市の自己イメージの掛け詞と当時の都市の身体状態とを比較することによって、心の病状を読み取ることが出来るはずである。その症状を医者が分析するだけでなく、患者自身が自分の身体と心の乖離を認め癒す努力を試みるところから、治癒への道が開けるかもしれない。近代京都が長

く患ってきた心の病の代表的な症状のひとつが、「古都」であり「みやこ」という強迫観念的な自己イメージ、いいかえると近代化に直面した古都の自負の表現である。

今回は、明治・大正・昭和の三時期に登場した三つの近代京都の自己イメージの標語を例にして、京都というまちの都市の計画に纏る近代病の特徴を診断してみた。

第一章 明治中期の京都市民の白昼夢

…「世界の公園 京都」

明治一七年頃から始まる、京都府下の名所旧跡を「公園地」に指定する上申運動は、明治一九年許可の円山公園を例外として、ことごとく却下される。北垣国道府知事は、京都の名勝地を「京都固有の財源」とみて「名勝地の盛衰は即ち京都市の盛衰」と重要視し、なかでも東山一帯を「公園同様の姿」とみて、土地官林であった東山を円山公園に編入させる上申運動を始める。この方針は後の民選初の内貴甚三郎市長に引き継がれるが、明治三二年の国有林野下戻法の公布により、命脈を断たれる。

北垣時代の晩年の明治二四年、府議会から知事に出された建議書のなかに、山水明媚社寺輪換の旧帝都を

「東洋の公園」と呼ぶレトリックが登場する。円山公園設置を含め、北垣の近代化路線を激しく批判した福沢諭吉でさえ、京都を「世界の遊園」と呼び、このレトリックが確立する。以後、「日本」世界の公園、京都「日本の公園」などのパージョンを伴いながら、「京都」世界の公園」説は、京洛名士の常套句となる。重要なことは、この種のプライドを含む自己イメージには、ある種のコンプレックスが同居していることである。近代都市として必要な都市施設の公園を、在来の名所旧跡として理解した明治の名士・地方役人・地方インテリ層の誤解が一方にある。その都市施設の公園を設置できなくても、もともと京都は「公園（名所旧跡）」であるという意識には、官林の公園化に失敗した京都人の「自負」が込められている。

第二章 公園のない「公園都市」

…都市計画の導入と苦しい自己イメージ

一九一九年になって、政府は初めて都市計画法と市街地建築物法を公布し、東京以外の都市の近代化に本腰を入れ始める。当然、営造物である都市施設として必要な公園設置の要求は高まる。一九一七年に市域を六〇平方キロメートルに拡大した京都には、府立公園を含めわずか四ヶ所の公園、市民一人当りにしてわず

か〇・四平方メートルの公園施設が設置されたのみであった。

内務省都市計画局が一九二二年に監修した「京都都市計画」（長期計画）の概要の公園の項目には、全市を公園と見なし公園設置を無用と見なす、過去の京都礼賛論を批判する条がある。社寺の境内を代用公園と見なすことは、「現代及び将来に適合したる近代的休養地」を必要とみる都市計画的視点からは、不十分であるというのである。

ところが、この計画策定に先立ち、内務省の都市計画課課長から都市計画区域設定の照会を一九一八年に受けた京都市工務課長は、次のようなやり取りの記録を残していた。すなわち、山紫水明名勝旧跡に富む「我が京都」は「日本の大公園」であると胸を張り、都市計画区域を指定する際、京都盆地東北西を住居地域に設定することで、公園都市の性格を保持できると答えている。事実、一九二二年に指定された「京都市都市計画区域」（九二平方哩）の設定理由書には、「公園都市たるの特徴を益々發揮せしむる」ため、都市計画区域の四〇％を占める山地を区域に編入した、と述べているのである。

この当時、都市計画の執行は、環状道路計画と市縦断道路の路線設定問題で、町中がひっきりかえるほ

どの激論の最中であり、公園どころの話ではなかった。その証拠に都市計画公園第一号の船岡山公園の計画決定は一九三二年、開園は一九三五年までまたなければならぬ。都市計画区域の山地が営造物の公園を代用する傾向は、明治以来依然として昭和の「大京都」にも引き継がれたのである。

一九一八年から一九三〇年代の京都に流行った「公園都市」標語は、まさに、公園のない「公園都市」のレトリックであった。まちの近代化に直面して明治の京都人が抱いた「自負」の発奮が、姿を変えて昭和の大京都にも登場している。

第三章 文化財都市・京都を米軍が救ったのか

…敗戦後の国際文化観光都市の起源とウォーナー伝説

太平洋戦争末期の日本都市への原爆投下作戦の進展と、投下都市の選定過程において京都が常に有力候補に位置づけられていた事情については、一九七〇年代のオーティス・ケリー氏、一九八〇年代の鈴木良氏、一九九〇年代には吉田守男氏、そして米国の軍事資料を広範に渉猟したアルペロピッツ氏の研究により、ほぼ明らかにされている。

一九四五年七月のボツダム会談のさなかに至るまで、

米国防軍の航空部隊は、京都を原爆投下の最有力都市のひとつに温存しており、原爆の物理的効果を測定するため、京都を通常爆撃の対象から外していた。そのため、京都は小規模の限定的空襲を四五年の一月と六月の二度被るに留まった。

ところが、原爆投下のため通常破壊が担保されたことを知らずにいた日本に、敗戦後、世界的に重要な文化財都市を、文化財保護を理由に米軍が破壊から救ったとする伝説が、奈良や京都そして鎌倉が生き残ったことの解釈として生まれる。その事実経過を解明した吉田守男氏の調査に依れば、その伝説の発端は、一九四五年十一月の朝日新聞の記事であった。

記事に登場する、ハーバード大学付属フォッグ美術館東洋部長「ラングドン・ウォーナー」(ママ)氏が、伝説の起点であった。ウォーナーが一九四四年四月以降に中心メンバーとなって作成した「戦争地域における美術的歴史的遺跡の保護・救済に関するアメリカ委員会」の文化財リストの真相は、戦争中の文化財保護を目的とするよりは、休戦時に、「枢軸国の博物館やその指導者の私的コレクションのなから被侵略国に引き渡されるべき「損害に対する返済用の」等価値の美術品・歴史的公文書のリスト」であることを、吉田氏は明らかにした。しかし、当時この真相を知らずに

いた美術評論家矢代幸男氏は、ウォーナーと三十年來の仲であったため、ウォーナーが軍部に影響力を行使し、爆撃を抑止したとの説を記事で述べた。この憶測が誤解とは知られることなく、瞬く間に、ウォーナー救済伝説として日本中を駆け抜けることとなった。その結果は驚くべきブームとなって、戦後史に跡を残すこととなった（詳細は吉田氏の著作を参照）。日本政府は、一九五五年のウォーナーの死の直後、勲二等瑞宝章を授与し、同年、高山義三京都市長もハーバード大学に爆撃抑止に対する感謝状を贈っているほどである。

驚いたことに、この伝説は戦後の京都イメージの起点になっている。一九五〇年一月に公布される「京都国際文化観光都市建設法」は、その発想の原点に、「京都は、日本文化の象徴であり、爆撃の目標から特に除外された世界平和の生きた記念像である。」という認識を置いている。爆撃目標からの除外が原爆の投下目標であった事実を知ることなく、京都の文化財が「国際的」である保証を、敗戦後日本中を駆け抜けたウォーナー伝説から得ていたのである。

この法律が京都の有力国会議員を中心とする議員立法であったことは、興味深い。当時、立て続けに立法されていた非戦災特定都市の復興法制度に乗り遅れま

いとした京都の名士たちは、今となってみれば誤解に基づく爆撃除外の「国際文化観光都市」という政府が用意した都市イメージを、戦後の京都イメージに選び取ったのである。

こうして、明治・大正・昭和の三断面を通じて、京都の自己イメージの発現に共通する性格が認められることが分かる。外部からやってくる近代化や開発などの圧力に対し、その都度発現する、この歴史都市の「自負」表現の深層心理的特徴である。

（2006.4.13 脱稿）

開所記念講演

界面としてのキャラクター

守 岡 知 彦

この講演をすることになって、何を話すべきか非常に悩んだ。というのも私の研究に関する抽象的・技術的な話を判りやすく話す自信はなく、また、対象である漢字の話を文字学者でない私がするのめどうかと思つた訳である。そこで、むしろ、今我々が確立しようとする努力している人文情報学の考え方や気持のエッセンスの幾らかなりでも伝えるような話にしようと思つた訳である。

そこで選んだトピックの一つが『界面 (interface)』である。近代的なソフトウェア設計の根底には、世界をどのようなものとして捉え、抽象化するかという『モデル化』という問題があるが、界面はモデル化の

結果の一つの側面であるとともに、世界を小さな世界の集合体として構成するソフトウェアのモジュール化における重要な概念でもある。界面はそれが属する形式的体系 (言語) によってモデル化された結果を抽象的に記述したものであるが、その抽象的な記述の先に世界の向こう側を見ることが示唆している (そしてこれは人文学と情報学という2つの世界の接点にいる私の立ち位置を象徴したものである)。

もう一つのトピックである『キャラクター』は一つには私が普段対象としている文字を示したものである。そして同時に人格や物語の登場人物などを示す言葉でもある。そこで、私が提案している文字処理手法『Chaon モデル』をとっかかりに文字、特に、漢字について簡単に述べるとともに、それを飛び越えて物語の登場人物、特に、『類型的キャラクター』について論じてみた訳である。無論、これは駄洒落ではあるのだが、対象物の情報学的構造の類似性に基づいて一般化 (抽象化) するというソフトウェア設計の態度を象徴した例といえなくもない。そして、文字のモデル化の中で生まれた抽象文字、字体 (グリフ)、字形 (glyph image)、異体字などの概念、あるいは、六書のような漢字の伝統的なモデルは類型的キャラクターの世界においてもある程度適用可能であるといえる。

そして、符号化文字モデルや東浩紀氏のデータベース・モデルへの不満も、キャラクターのテキスト・物語への界面としての機能的側面が欠けている点が共通しているといえなくもない。

こうした『一般キャラクター論』を今後展開して行くかどうかはともかくとして、人文情報学のエッセンスの幾らかなりとも伝えることができたならば幸いである。

ピアノリストになりたい！

——練習曲の思想と一九世紀

岡田 暁生

バイエル、ツェルニー、クレメンティ、ハノン、ビシュナ等々言うまでもなく、ピアノ学習者必修の「練習曲」の数々だ。多くの人にとって「ピアノを学ぶ」とは、これらの練習曲をくる日もくる日も何時間もさうらうことと、ほぼ同義のはずである。他のどんな楽器にも増してピアノは、練習曲というものと密接に

結びついている。だが実は、こうした指のトレーニングのみを目的とする「練習曲」なるものが生まれたのは、一九世紀に入ってからのことである。ベートーヴェンやクレメンティの時代からピアノ演奏者に要求される技術難度が飛躍的に上がり、多くの曲に現れる難パターンを取り出して体系化し、効率的に学習者にマスターさせることを目的とする曲集が書かれるようになってきたのである。とりわけ一九世紀後半になると、もはや「曲」とすら言えない、指トレーニングのための純然たる「ドリル」が多く出版されるようになった。これは *Ubung* とか *Exercise* と呼ばれるもので、ピアノ学習者なら誰でも知っているハノンなどがこれにあたる。

ハノンの序文には「この練習を最初から最後まで通して弾いても一時間半しかかかりません。これを毎日最初から終わりまで弾けば、やがてあなたの指はどんな曲でも弾けるようになっていくでしょう」などという意味のことが書いてある。「ドリルを機械的にこなしていれば、自動的に、自動化された指（＝自在に何でも弾ける指）が出来る」というわけである。実際一九世紀には多くのピアノリストが、譜面台に楽譜の代わりに新聞などをのせ、それを読みながら、ひたすら一日に何時間も音階や分散和音や練習曲を次々にさらう

ということをやっていたらしい。一九世紀のピアノ学習者の多くは、いつか自分の指が新聞を読みながらでも曲を弾いてくれる自動機械になることを念じながら、日々ハノンのような指練習に励んだに違いない。

一九世紀の練習曲が「自動化された指」に託したものの、それは何よりも、人間離れた「強さ」と「均質さ」であつたと言えるだろう。一九世紀を通してピアノの鍵盤はどんどん重くなつていった。一八世紀までの鍵盤楽器はサロンのようなところで演奏される場合がほとんどだったので、「大きな音」などまったく必要とされなかったのに対し、一九世紀にはいると一〇〇〇人を超えるコンサートホールで弾くといった機会がどんどん増えるようになる。ピアノは一八世紀末までの木製の小さな箱から、鋼鉄フレームで支えられた巨大な黒塗りのメカへと変貌していった。一九世紀のピアノリストの指に求められたのは、何より「耐久力」であり「大音量」であつた。あれほど音楽の「精神性」を強調した一九世紀西洋が、いわば「音楽史の裏で」このような「マツチョな指崇拜」とでも言うべきものをはびこらせたことは、皮肉と言うほかない。だが、練習曲と指矯正器具で指を鍛え上げた多くの学習者たちが、何の疑問も感じずに、同じそのマツチョな指でもって、肅々とバッハやベートーヴェンや

シヨパンを奏でていたであろうこと、これもまた否定できない事実なのである。

雲岡石窟寺の考古学研究

岡村 秀典

人文科学研究所の前身である東方文化研究所は、中国山西省大同市に所在する雲岡石窟の調査を一九三八～一九四四年の七か年にわたって実施し、その報告書は水野清一・長廣敏雄『雲岡石窟』全一六卷三二冊（一九五二～一九五六年）として公刊された。北魏の仏教寺院は、礼拝の場である石窟や仏殿のほか、多数の僧侶が講經・誦禪する講堂・禪堂や生活の場である僧坊などからなり、調査の当時、そうした石窟寺院の総合的な研究をめざして、石窟の前庭部や台上寺院址が発掘され、余暇を利用して石窟周辺の遺址が精力的に踏査された。北魏の都城であつた平城遺址、文明太后のために孝文帝が造営した方山永固陵など、雲岡石

窟と同時代の史蹟もくまなく調査された。しかし、収集した遺物のほとんどは小さな破片であったため、それを整理して考古学の研究資料として利用されることはなかった。

調査より六〇年あまりが過ぎた。中国では一九九〇年代に雲岡石窟の前面が広く発掘され、二〇〇一年には世界遺産に登録された。平城遺址の調査もはじまった。いっぽう日本の考古学研究もいちじるしく進歩した。地表面に散らばっている小さな土器や瓦の破片からも、多くの歴史情報を引きだすことができるようになった。そうした日中両国の研究動向をふまえながら、考古学から雲岡石窟の新しい研究を発信するべく、二〇〇二年より人文研に保管する出土遺物の整理をはじめ、このたび岡村編『雲岡石窟』遺物篇（朋友書店、二〇〇六年）として報告書を公刊した。

具体的な成果はその報告書に詳しいが、要点だけをあげれば、石窟以前の新石器・秦漢時代の歴史的景観を示したこと、瓦をもとに北魏の平城時代を四期に編年し、そのうち五世紀後半の雲岡石窟を三期に編年したこと、四八〇年代前半に造営された方山永固陵の瓦をもとに雲岡石窟第九・第一〇洞の年代を四八〇年代後半に比定したこと、石窟の台上に木造瓦葺きの僧院が建ち並び、四七〇年代に曇曜の釈経した僧院は東部

台上にあり、西部台上には緑釉瓦を葺いた華麗な尼寺が四九〇年代に建てられたこと、考古資料と「金碑」の記載をもとに北魏から遼・金代にいたる雲岡石窟寺の歴史の変遷を明らかにしたこと、磁州窯の影響を受けた遼金代の白磁の特徴を明らかにしたこと、などがある。



退職記念講演

詩を読む・語る・訳す

宇佐美

齊

「詩に註釈は必要か」という問いを發することから始めたい。私が専攻する象徴主義以降のフランス近代・現代詩のある種の難解さということに関連させて考えてみると、この問いはとりわけ切実である。詩が分かる、分からないという問題に関して言えば、例えば「分からない」ということの意味が、テキストと読者とが出会いを失したか、あるいはどのような火花をも散らすことなく終ってしまった、ということであるのならば、これにわざわざ註をつけていわば頭腦的に「分からせよう」とすること自体が、そもそも無意味だろう。たとえ難解であると感じられたにせよ、初めに詩の一行、あるいは片言隻語に引つ掛かりを覚え、

あるいはなぜかは分らないけれども不思議な魅力を感じた読者が、そこから少しずつ独自に作品ないし当該詩人の世界へと導かれる糸口を見出し出てゆくのであれば、註釈などというものはほんらい不要のはずである。

とりあえず次のような答を今ここに提出してみたい。「基本的には不要である。ただし読者の理解を助けたら深めたりするための、最小限の語註、語釈、そして文体論的な説明はあってもいい。ただしそれらは読者の自由裁量権を侵害するものであつてはならない。あくまでも控えめに、節度あるものを心掛けるべきである」と。かつて私は当研究所の共同研究の成果報告書「ボードレール『悪の花』註釈」（多田道太郎編、一九八六年刊、一九八九年再刊）のあとがきに、こんな言葉を記したが、この考えは今も変わらない。

「ひとりの詩人がみずからの生と引き換えに残した彫心鏤骨のことばを、後世の人間があれこれ詮議して註釈を加える―、考えてみれば大それた企てである。

漢詩人・阿藤伯海は、『諳んじてのち之を論ずるは善し、論ぜず之を楽しむは更に善し』と述べた。この教訓を肝に銘じたうえで、なおかつ論すべき何ほどのものが残されているか、註釈者の節度と誠実さが要求されるであろう」。

ところですぐれた詩人が残したテキストのしたたかさ、重厚な手ごたえを、私たちに納得させてくれるような註釈があり得ることもまた事実である。例えば『悪の花』所収の「交感」Correspondancesと題するソネ、この作品には永い解釈の歴史がある。前半八行は当時（十九世紀中葉）一般に流布していた教義としての「照応理論」や美学としての「共感覚の理論」を、メッセージとして要約する構えをみせており、この点についての典拠研究は枚挙にいとまがない。けれどもこの作品が独創的であり得たのは、後半六行で具体的に四つの香りを列挙するに及んで、「精神と感覚の熱狂を歌う」ことへと力点を移すことによって、そのような理論的美学的メッセージの伝達ということからは大いに逸脱して、むしろ個別的なもののこのこだわりへと横滑りしてゆくところにある。こういったことを文体論や統辞論の視点を踏まえながら、精緻に分析し論証してみせたのは、脱構築派の文学研究者ポール・ド・マンであった。この人の「抒情詩における擬人観と転義法」と題する論考は、「交感」というテキストが、テーマ、語彙、イメージ、比喩などにおいて、『悪の花』のもう一つのテキスト「脅迫観念」Obsessionと明らかな連関を示している、ということを見事に証明してみせた。作者が表向きに標榜する構築的

な世界が、内部から崩壊していく契機を見出し、その細部にこだわって徹底的に論じわけるところに、新しい註釈の可能性が示唆されているのである。

詩の言語というものは、ある意味で学説や教義や物語、つまりは既成の言説によって流布される言葉の網の目が、実はいかに不備なものであり不完全なものであるのかを、私たちに自覚させるためにある、と言ってもいいのではないだろうか。言葉をあやつる詩人の営みは、世界に網を張って真理という獲物の到来を待つ蜘蛛のそれに似ている。そしてその蜘蛛の営みは、太古いらい人類が世界を認識しようとして不断に行なってきた試行錯誤そのものであろう。ド・マンが明らかにするように、ボードレールの仕業で興味深いのは、既成の認識論や美学を個性的な文体が見事に裏切っていく、その実態だろう。細部に宿る神を見出し、詩人にとつての思想はテキストの文目のなかにしかあり得ない、という事実を、あくまでもテキストそのものに即して浮かび上がらせることが、詩を語るという行為に与えられる積極的な意義である、と言っているのかも知れない。詩のテキストと読者との間に註釈というものが介在する根拠を問われるならば、今はそのように答えるほかはない。

彙報

おくりもの

。富永茂樹教授はフランス共和国パルム・アカデミック(学術功労賞) オフィシエ級を受章(十一月二六日付)。

訃報

。飯沼二郎名誉教授(八七歳)は、九月二四日逝去。

。林巳奈夫名誉教授(八十歳)は、二〇〇六年一月一日逝去。

人のうごき

。金文京教授(東方学研究所)を当研究所長(四月一日〜二〇〇七年三月三十一日)及び附属漢字情報研究センター長(四月一日〜九月三十日)に併任。

。横山俊夫教授(人文学研究所・大学院地球環境学堂 両任)は副学長ならびに国際交流推進機構長に併任(四月一日付)。

。岩城卓二大阪教育大学助教授を助教授

(人文学研究所)に採用(四月一日付)。

。竹沢泰子助教授(人文学研究所)は当研究所教授(人文学研究所)に昇任(四月一日付)。

。岡村秀典助教授(東方学研究所)は当研究所教授(東方学研究所)に昇任(四月一日付)。

。永田知之氏を助手(附属漢字情報研究センター)に採用(五月一日付)。

。齋藤智寛東北大学大学院文学研究科助手を助手(附属漢字情報研究センター)に採用(八月一日付)。

。森本淳生助手(人文学研究所)は辞任の上(八月三十一日付)、一橋大学大学院言語社会研究科助教授に就任。

。森時彦教授(東方学研究所)を附属漢字情報研究センター長に併任(十月一日〜二〇〇七年三月三十一日)。

。久保昭博氏を助手(人文学研究所)に採用(十二月一日付)。

。宇佐美齊教授(人文学研究所)は定年により退職(二〇〇六年三月三十一日

付)。

。エスポジト、モニカ助教授(東方学研究所)は辞任の上(二〇〇六年三月三十一日付)、二〇〇六年四月より当研究所招へい外国人学者として受入。

。小牧幸代助手(人文学研究所)は辞任の上(二〇〇六年三月三十一日付)、高崎経済大学地域政策学部講師に就任。

。大原嘉豊助手(東方学研究所)は辞任の上(二〇〇六年三月三十一日付)、京都国立博物館研究員に就任。

海外での研究活動

。金文京教授(東方学研究所)は、四月五日大阪発、香港城市大学に於いて講演を行い、四月十日帰国。

。陳慶浩客員教授は、四月八日大阪発、台湾国立嘉義大学に於いて第二届中国小説戯曲国際學術研討会に出席し、四月十一日帰国。

。武田時昌教授(附属漢字情報研究センター)は、四月二四日大阪発、ラディソン・ソウルプラザホテルに於いて「日韓科学史・儒学史比較研究」研究會議に出席し、四月二八日帰国。

。ウィッテルン、クリスティアン助教教授（附属漢字情報研究センター）は、四月十五日大阪発、ハイデルベルグ科学院に於いてワークショップ「中国石刻仏典」に出席、フランス規格協会に於いてT E I 評議委員会に出席し、五月二日帰国。

。古松崇志助手（東方学研究部）は、文部科学省研究拠点形成費補助金により、五月一日大阪発、巴林右旗博物館、内蒙古文物考古研究所及び中国国家図書館等に於いて遺跡・文物調査、研究打合せを行い、五月十一日帰国。

。曾布川寛教授（東方学研究部）は、五月十日大阪発、台湾大学芸術史研究所に於いて外部評価、中央研究院歴史語言研究所及び故宮博物院に於いて美術資料蒐集を行い、五月十四日帰国。

。矢木毅助教（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、五月十一日大阪発、スウェーデン王立アカデミーに於いてワークショップ「東アジアにおける死刑」に出席し研究発表を行い、五月十七日帰国。

。富谷至教授（東方学研究部）は、文部

科学省科学研究費補助金により、五月十日大阪発、スウェーデン王立アカデミーに於いてワークショップ「東アジアにおける死刑」に出席し研究発表を行い、ストックホルム大学に於いて研究打合せを行い、五月十九日帰国。

。竹沢泰子教授（人文学研究部）は、文部科学省海外先進教育研究実践支援プログラム補助金により、三月三十日成田発、ハーヴァード大学に於いて人種に関する資料収集及び研究打合せを行い、五月二十日帰国。

。田中祐理子助手（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、五月二五日大阪発、パリ・パスツール研究所に於いて微生物学研究に関する資料調査を行い、六月四日帰国。

。ウィッテルン、クリスティアン助教教授（附属漢字情報研究センター）は、文部科学省研究拠点形成費補助金により、六月十三日大阪発、ヴィクトリア大学に於いてACH/ALIC二〇〇五年度共同年会に出席及び研究発表を行い、六月二十日帰国。

。高田時雄教授（東方学研究部）は、文

部科学省研究拠点形成費補助金により、六月二三日大阪発、上海社会科学院に於いて「古代内陸アジアと中国文化国際学術研討会」に出席及び漢字文献の調査を行い、六月二七日帰国。

。佐野誠子助手（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、六月二六日大阪発、南京博物院、復旦大学及び上海博物館に於いて中国南朝宗教資料の調査を行い、六月三十日帰国。

。宮紀子助手（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、七月一日大阪発、台湾国家図書館及び故宮博物院に於いて『元史』の志と表の再編纂の研究に関する調査及び資料収集を行い、七月八日帰国。

。田辺明生助教（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金及び京都大学教育研究振興財団助成金により、三月二二日大阪発、ジャワハル・ネルー大学に於いて国際会議に出席、国立文書館に於いて「南アジア近代における『民主主義と開発』」の歴史的研究、ウトカル大学等に於いて「自由とダルマの人類学・現代インドにおけ

る地域倫理の模索」研究を行い、七月十日帰国。

。高田時雄教授（東方学研究部）は、文部科学省研究拠点形成費補助金により、七月三日大阪発、ロシア国立アカデミー東方学研究所ベテルブルグ支所に於いて漢学文献の調査及び敦煌学国際連絡委員会幹事会に出席し、七月十日帰国。

。森本淳生助手（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、六月二十四日大阪発、フランス国立図書館国際文化センター及びクレルモン・フェラン大学に於いてポール・ヴァレリーに関する資料調査及び研究発表等を行い、七月十一日帰国。

。エスポジト、モニカ助教授（東方学研究部）は、七月二三日大阪発、台湾中央研究院に於いて道教プロジェクトに関する研究打合せを行い、七月二五日帰国。

。ウィッテルン、クリスティアン助教授（附属漢字情報研究センター）は、七月十八日大阪発、中華仏学研究所及び中華電子仏典協会に於いてワークショップ

ップ、デジタル・テキストのためのプログラムニングに出席及び研究打合せを行い、七月二七日帰国。

。藤原辰史助手（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、七月十八日大阪発、ベルリン、リヒターフェルデ連邦図書館に於いてナチス期農業政策に関する資料収集を行い、八月七日帰国。

。岡村秀典教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、八月五日大阪発、陝西省考古研究所に於いて遺跡の考古学的調査を行い、八月十二日帰国。

。高田時雄教授（東方学研究部）は、八月九日成田発、大英図書館及びブロイセン国立図書館に於いて奈良平安古写経及び関連文献調査を行い、八月十八日帰国。

。池田巧助教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、七月二三日大阪発、中央民族大学、西南民族大学、寧夏大学及び康定近郊に於いて木雅語及びカム方言の記述調査を行い、八月二四日帰国。

。金文京教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、八月十七日大阪発、首都師範大学に於いて中国古代小説文献とデジタル化国際研討会及び明代文学と文化国際学術研討会に参加・論文発表を行い、八月二四日帰国。

。水野直樹教授（人文学研究部）は、八月二一日大阪発、上海ホテルに於いて第四回アジア研究者世界大会に参加・発表、並びに上海図書館に於いて資料調査を行い、八月二六日帰国。

。中西裕樹助手（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、八月七日大阪発、香港中文大学及び海豊県誌弁公室に於いてシヨオ語の現地調査及び資料収集を行い、八月二七日帰国。

。李昇燁助手（人文学研究部）は、八月十四日大阪発、ソウル国立中央図書館国史編纂委員会及び韓国学中央研究院に於いて日本外務省の朝鮮人官僚研究及び植民地居住者の帝国議会請願事項に関する研究のための資料調査を行い、八月二七日帰国。

。船山徹助教授（東方学研究部）は、京

都大学教育研究振興財団助成金等により、八月二十日大阪発、ウィーン大学に於いて八世紀のインドの仏教認識論における宗教的側面に関する研究発表及び資料収集を行い、八月三十日帰国。山室信一教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、八月二三日大阪発、ゴビ自然博物館、モルツォク砂丘に於いてゴビ砂漠地域における空間構成・生業の態様とその展示方法の調査、ウランバートルに於いて都市部・草原地域における空間認識及びモンゴル・東アジアの政治思想史に関する史跡調査を行い、八月三十日帰国。

。菊地暁助手（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、八月二三日大阪発、ゴビ自然博物館、モルツォク砂丘に於いてゴビ砂漠地域における空間構成・生業の態様とその展示方法の調査、ウランバートルに於いて都市部・草原地域における空間認識及びモンゴル・東アジアの政治思想史に関する史跡調査を行い、八月三十日帰

国。

。谷川穰助手（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、八月二三日大阪発、ゴビ自然博物館、モルツォク砂丘に於いてゴビ砂漠地域における空間構成・生業の態様とその展示方法の調査、ウランバートルに於いて都市部・草原地域における空間認識及びモンゴル・東アジアの政治思想史に関する史跡調査を行い、八月三十日帰国。

。坂本優一郎助手（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、八月十六日大阪発、大英図書館及びギルドホール図書館に於いてイギリス財政革命の社会的影響に関する史料調査を行い、八月三十一日帰国。

。古松崇志助手（東方学研究部）は、八月十九日大阪発、新疆ウイグル自治区イリ川流域等に於いて歴史・考古・自然環境のフィールド調査を行い、九月三日帰国。

。横山俊夫教授（人文学研究部）は、八月二六日大阪発、ウィーン大学に於いて第十一回ヨーロッパ日本研究者協会

総会にて基調講演を行い、九月五日帰国。

。石川禎浩助教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、八月二三日大阪発、荊州（湖北省）に於いて中国近現代史関係の実地調査及び資料調査を行い、北京市档案馆等に於いて中国社会主义文化についての資料調査を行い、九月六日帰国。

。森時彦教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、八月二三日大阪発、武漢、荊州、常州、上海等に於いて中国県制に関する現地調査及び資料調査を行い、九月六日帰国。

。小関隆助教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、八月二九日大阪発、アイルランド国立図書館に於いて「十九世紀末イギリスのポピュラー・コンサヴァティズム」に関わる史料調査を行い、九月八日帰国。

。稲葉穰助教授（東方学研究部）は、八月十六日大阪発、イランにおける前イスラーム期遺跡群共同学術調査を行い、九月九日帰国。

。大原嘉豊助手（東方学研究部）は、文

部科学省科学研究費補助金により、九月一日大阪発、杭州、湖州、蘇州及び上海に於いて中国仏教美術資料調査を行い、九月十二日帰国。

。岩井茂樹教授（東方学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、九月十三日大阪発、無錫市及び上海市内に於いて中国県制の研究にかかわる実地調査及び資料収集を行い、九月十八日帰国。

。森時彦教授（東方学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、九月十三日大阪発、無錫市及び上海市内に於いて中国県制の研究にかかわる実地調査及び資料収集を行い、九月十八日帰国。

。エスポジト、モニカ助教授（東方学研究所）は、八月二十日大阪発、コレージュ・ド・フランス図書館に於いて道藏輯要計画調査を行い、九月二六日帰国。

。宮紀子助手（東方学研究所）は、文部科学省研究拠点形成費補助金により、九月十九日大阪発、遼寧省文物考古研究所、遼寧省博物館等に於いて遼寧省

における遼文化の歴史・現状・環境に関する学術調査を行い、九月二六日帰国。

。古松崇志助手（東方学研究所）は、文部科学省研究拠点形成費補助金により、九月十九日大阪発、遼寧省文物考古研究所、遼寧省博物館等に於いて遼寧省における遼文化の歴史・現状・環境に関する学術調査を行い、九月二六日帰国。

。大原嘉豊助手（東方学研究所）は、文部科学省研究拠点形成費補助金により、九月十九日大阪発、遼寧省文物考古研究所、遼寧省博物館等に於いて遼寧省における遼文化の歴史・現状・環境に関する学術調査を行い、九月二六日帰国。

。ウィッテルン、クリスティアン助教授（附属漢字情報研究センター）は、九月二五日大阪発、オックスフォード大学に於いて「田」ワーキング・グループ会議に出席及び研究打合せを行い、九月三十日帰国。

。大浦康介教授（人文学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、九

月二三日大阪発、フランス社会科学高等研究院及びフランス国立図書館に於いてフィクション研究のための資料調査及び研究打合せを行い、十月三日帰国。

。倉島哲助手（人文学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、九月二八日成田発、フランス外務省国際会議センターに於いてアジア・ネットワーク第二会議に出席・研究報告を行い、十月三日帰国。

。池田巧助教授（東方学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、十月一日大阪発、大英図書館及びフランス国立図書館に於いてナム語文献調査を行い、十月十四日帰国。

。岡村秀典教授（東方学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、十月十七日大阪発、西安、洛陽、邯鄲等に於いて北魏時代の遺跡と出土遺物の調査を行い、十月三十日帰国。

。藤井律之助手（東方学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、十月二十日大阪発、西安、洛陽、邯鄲等に於いて北魏時代の遺跡と出土遺物の

調査を行い、十月三十日帰国。

。加藤和人助教授（人文学研究部）は、十月二三日大阪発、ソルトレイクシティに於いて第八回国際 HapMap 会議及び米国人類遺伝学会に出席し、十月三十一日帰国。

。中西裕樹助手（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、十月二六日大阪発、廈門大学に於いて第三八回国際漢蔵語學術研討会に出席し、十一月二日帰国。

。BENARI, Eyal 外国人研究員は、十一月一日大阪発、香港大学日本研究所に於いて口述試験等を行い、十一月三日帰国。

。ウィッテルン、クリステイアン助教授（附属漢字情報研究センター）は、十月二六日大阪発、ブルガリア科学院に於いて TEI メンバースミューティングに出席、ハイデルベルグ科学院に於いて石刻仏典のデジタル化についての研究打合せを行い、十一月六日帰国。

。山室信一教授（人文学研究部）は、十一月二日大阪発、ソウル大学に於いて講演及び国際シンポジウム「国際政治

と東アジア」参加を行い、十一月六日帰国。

。岡田暁生助教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、十一月九日大阪発、フィレンチェ音楽院図書館及びヴェネチア音楽院図書館に於いて十九世紀オペラに関する資料調査を行い、十一月十五日帰国。

。安岡孝一助教授（附属漢字情報研究センター）は、文部科学省研究拠点形成費補助金（一部先方負担）により、十一月十二日大阪発、上海師範大学に於いて敦煌学知識庫国際學術研討会に出席し、十一月十五日帰国。

。高田時雄教授（東方学研究部）は、文部科学省研究拠点形成費補助金（一部先方負担）により、十一月九日大阪発、香港大学に於いて第五次中文文献資源共建共享会議に出席、上海師範大学に於いて敦煌学知識庫国際學術研討会に出席し、十一月十六日帰国。

。田中雅一教授（人文学研究部）は、十一月十九日大阪発、アジア文明博物館に於いて身体資源及び性の表象についての調査を行い、十一月二一日帰国。

。小牧幸代助手（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、十一月六日大阪発、デリーに於いてムスリム聖者ニザームッディーンの墓廟における聖者祭の調査を行い、十一月二七日帰国。

。BENARI, Eyal 外国人研究員は、十一月二一日大阪発、 Lund 大学に於いて文化人類学に関する会議に出席、マルモ大学に於いて講演を行い、十一月二八日帰国。

。田中雅一教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、十二月二日大阪発、ゴアにおいて薬用植物の生産、流通、消費についての調査、国際会議「贈与交換経済における貨幣資源の浸透」に出席及び発表を行い、十二月二一日帰国。

。中西裕樹助手（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、十二月二二日大阪発、広西民族学院に於いて瀕危語言国際學術研討会に出席し、十二月二五日帰国。

。高田時雄教授（東方学研究部）は、文部科学省研究拠点形成費補助金により、

十二月二四日大阪発、台湾国家図書館に於いて漢籍データベースの相互乗り入れに関する研究打合せを行い、十二月二七日帰国。

。山崎岳助手（附属漢字情報研究センター）は、文部科学省科学研究費補助金により、十二月十九日大阪発、温州・福建沿海地域に於いて東アジア海域交流史関連史跡の現地調査を行い、十二月二八日帰国。

。永田知之助手（附属漢字情報研究センター）は、十二月十八日大阪発、台北中央研究院歴史語言研究所に於いて唐代の文学批評に関する調査及び資料収集を行い、二〇〇六年一月十四日帰国。

。久保昭博助手（人文学研究部）は、二〇〇六年一月六日大阪発、フランス国立図書館に於いて近代詩の虚構性に関する資料蒐集、パリ第三大学に於いて博士論文審査会及びシンポジウムに参加し、二〇〇六年一月二十日帰国。

。BENJARI, Eyal 外国人研究員は、二〇〇六年一月九日大阪発、フロリダ大学並びにジョージ・ホプキンス大学、アメリカ中東研究所に於いて文化人類

学に関する講演、ワークショップ、会議に参加し、二〇〇六年一月二二日帰国。

。大浦康介教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇六年一月十三日大阪発、パリ社会科学高等研究院及びフランス国立図書館に於いてフィクション研究に関する研究打合せ及び資料収集を行い、二〇〇六年一月二二日帰国。

。ウィッテルン、クリステイアン助教授（附属漢字情報研究センター）は、二〇〇六年一月十六日大阪発、中華仏学研究所に於いて「仏教情報学」講義及び資料収集を行い、二〇〇六年一月二五日帰国。

。安岡孝一助教授（附属漢字情報研究センター）は、文部科学省研究拠点形成費補助金により、二〇〇六年一月二四日大阪発、Milwaukee Public Library並びにNew York Public Libraryに於いて、文字コードとキー配列に関する所蔵調査を行い、二〇〇六年二月五日に帰国。

。宮宅潔助教授（人文学研究部）は、文

部科学省科学研究費補助金により、二〇〇六年二月二日大阪発、ミュンスタ大学に於いて、二国間共同研究事業の打合せ、及び資料調査を行い、二〇〇六年二月十四日に帰国。

。田中祐理子助手（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇六年二月九日大阪発、ウエルカム医学史研究所に於いて、微生物学発展史関連資料の調査、収集を行い、二〇〇六年二月十六日に帰国。

。池田巧助教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇六年二月十三日大阪発、中央研究院語言研究所に於いてナム語に関連する西南中国の言語についての資料収集を行い、漢珍數位圖書股份有限公司に於いてデータ入力の仕事についての打合せを行い、二〇〇六年二月十六日に帰国。

。石川禎浩助教授（東方学研究部）は、二〇〇六年二月二二日大阪発、北京大学歴史系、中国社会科学院近代史研究所、中国国家図書館、中国社会科学出版社等に於いて、歴史教科書及び歴史

教育に関する調査を行い、二〇〇六年二月二五日に帰国。

。藤井正人教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇六年二月十三日大阪発、インド、マドラス・チェンナイ他ヴェーダ伝承地に於いて、ヴェーダ伝承の現地調査を行い、二〇〇六年二月二七日に帰国。

。横山俊夫教授（人文学研究部）は、学長裁量経費「学術交流協定校への派遣事業」により、二〇〇六年二月十八日大阪発、オックスフォード大学に於いて、「京都大学の基本理念」英語版作成並びに環境変動研究所（ECI）等の教育研究組織調査を行い、二〇〇六年二月二八日帰国。

。水野直樹教授（人文学研究部）は、二〇〇六年二月二六日大阪発、済州大学に於いて、日本軍戦争遺跡現地調査学術会議に参加、コメントを行い、二〇〇六年三月一日に帰国。

。ウィットテルン、クリスティアン助教授（附属漢字情報研究センター）は、二〇〇六年三月三日大阪発、中華仏学研究所に於いて、中華仏学第5回国際会

議に出席を行い、二〇〇六年三月八日に帰国。

。横山俊夫教授（人文学研究部）は、二〇〇六年三月八日大阪発、北京大学に於いて、第三回環太平洋大学協会（APRU）シニアスタッフ会合における「研究開発フォーラム」での招待講演を行い、二〇〇六年三月十一日帰国。

。エスポジト、モニカ助教授（東方学研究部）は、二〇〇六年二月十五日大阪発、台湾中央研究院歴史語言研究所に於いて、道藏輯要研究に関する資料収集並びに研究打合せを行い、二〇〇六年三月十五日に帰国。

。麥谷邦夫教授（東方学研究部）は、二〇〇六年三月十三日大阪発、香港中文大学に於いて、博士學位論文の試問を行い、二〇〇六年三月十六日に帰国。

。高木博志助教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇六年三月十四日大阪発、政府記録所（ソウル分館）並びに国立中央博物館に於いて、日韓の近代の文化財保護にかかわる史料調査を行い、二〇〇六年三月十六日に帰国。

。藤井律之助手（東方学研究部）は、京都大学教育研究財団助成金により、二〇〇六年三月二十日大阪発、北京大学に於いて、魏晉南朝の政治制度の研究を行い、二〇〇六年三月十九日に帰国。

。田辺明生助教授（人文学研究部）は、京都大学教育研究振興財団助成金により、七月二三日大阪発、インド、ジャワハルラル・ネルー大学に於いて国際会議に出席、国立文書館に於いて「南アジア近代における『民主主義と開発』」の歴史的研究、ウトカル大学等に於いて「自由とダルマの人類学…現代インドにおける地域倫理の模索」についての臨地調査・研究を行い、二〇〇六年三月二二日帰国。

。田中雅一教授（人文学研究部）は、二〇〇六年三月三日大阪発、ロンドン大学、オスロ大学、コペンハーゲン大学、フリー大学に於いて、宗教を中心とする文化接触の研究調査を行い、二〇〇六年三月二二日に帰国。

。高田時雄教授（東方学研究部）は、二〇〇六年三月十二日大阪発、ロシア科学院東洋学研究所サントク・ペテルブ

ルグ支所並びにキヨソネ美術館に於いて、漢籍の調査と研究を行い、二〇〇六年三月二二日に帰国。

。山崎岳助手（附属漢字情報研究センター）は、研究拠点形成費補助金により、二〇〇六年三月五日大阪発、ハンノム研究院・国立図書館・国立科学技術ドキュメンテーションセンター・国立公文書館・ハノイ文化大学・ホーチミン市総合科学図書館並びに図書館協会並びに大学図書館に於いて、漢字文献の情報化に関する調査、華人街会館等に於いて、在越華人の漢語文化に関する現地調査を行い、二〇〇六年三月二四日に帰国。

。倉島哲助手（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇六年一月二三日大阪発、マンチェスター大学社会学部に於いて、マンチェスター地域における武術の実践についての現地調査を行い、二〇〇六年三月二四日に帰国。

。高井たかね助手（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇六年三月十六日大阪発、福州市

に於いて唐宋建造物に関する調査、福州市及び莆田市に於いて明代建造物の調査並びに宋代水利灌漑技術に関する調査、泉州市並びに晋江市に於いて明清宗教建築・宋代石造建築の調査、及び明清建造物の調査、南靖県並びに漳浦県に於いて明清建造物・民具、及び周辺地区を含めた伝統的住居文化に関する調査、廈門市に於いて廈門における生活・習俗に関する調査を行い、二〇〇六年三月二六日に帰国。

。森時彦教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇六年三月十四日大阪発、上海市・無錫市等に於いて、中国県制に関する現地調査・資料調査を行い、二〇〇六年三月二七日に、帰国。

。富谷至教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇六年三月十六日大阪発、ミュンスタール大学に於いて二国間共同研究の遂行と二〇〇六年度の計画の相談を行い、二〇〇六年三月二七日に帰国。

。エスポジト、モニカ助教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助

金により、二〇〇六年三月十八日大阪発、四川大学図書館・北京大学図書館に於いて江南清道教に関する資料収集を行い、二〇〇六年三月二七日に帰国。

。金文京教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇六年三月二四日大阪発、中山大学に於いて、中国伝統戯曲国際学術研討会に参加・論文発表を行い、二〇〇六年三月二七日に帰国。

。竹沢泰子教授（人文学研究部）は、大学改革推進等補助金により、五月三十日成田発、ハーヴァード大学に於いて「人種・人種差別の人文学と遺伝学の融合研究」の実施を行い、二〇〇六年三月二九日に帰国。

。稲葉稜助教授（東方学研究部）は、二〇〇六年三月二十日大阪発、ウィーン大学・オーストリア国立アカデミーにて研究打合せ・資料収集、ウィーン大学芸術史研究所にて Afghanistan Workshop 参加、ウィーン大学図書館にて所蔵文書調査を行い、二〇〇六年三月二九日に帰国。

外国人研究員

。安 承俊 韓国学中央研究院専門委員
東アジア古文書学の比較研究

(文化生成研究客員部門)

受入教員 金教授

期間 七月七日～二〇〇六年一月六日

。BENJARI, Eyal エルサレム・ヘブ

ライ大学教授

自衛隊の文化人類学的研究

(文化連関研究客員部門)

受入教員 田中雅一教授

期間 九月七日～二〇〇六年三月一日

。楊 奎松 北京大学歴史系教授

近代東アジア社会主義運動史

(文化連関研究客員部門)

受入教員 石川助教授

期間 二〇〇六年三月十六日～

二〇〇六年九月十二日

。崔 鳳春 広西師範大学社会文化手旅

遊学院教授

日中戦争期中国における朝鮮人の抗日

運動と日本人の反戦運動

(文化生成研究客員部門)

受入教員 水野教授

期間 二〇〇六年一月二十六日～

二〇〇六年八月二十日

招聘外国人学者

。蔡 哲茂 中央研究院歴史語言研究所
副研究員

京都大学人文科学研究所所蔵甲骨文研

究

受入教員 高田教授

期間 四月十日～五月九日

。安 承俊 韓国学中央研究院専門委員

東アジア古文書学の比較研究

受入教員 金教授

期間 四月十五日～七月六日

。陳 金華 カナダ・ブリティッシュコ

ロンビア大学助教授

唐代仏教における法蔵の歴史的 위치

け

受入教員 船山助教授

期間 四月二十日～六月八日

。池上英子 ニュー・スクール大学大学

院教授

祇園祭の歴史社会学的研究

受入教員 高木助教授

期間 五月二七日～七月二七日

。蔡 荣婷 国立中正大学中国文学系教
授

唐宋時期禪宗詩偈の研究

受入教員 高田教授

期間 七月二十日～八月五日

。黃 蘭翔 中央研究院台湾史研究所副

研究員

六朝時代における仏教伽藍に示された

中国的空間秩序

受入教員 田中淡教授

期間 八月一日～九月三十日

。賴 惠敏 中央研究院近代史研究所研

究員

中国清代の地方財政の研究

受入教員 岩井教授

期間 八月二日～九月一日

。外村 中 ヴェルツブルク大学東方文

化研究所講師

中国を中心とする東アジア造園史の研

究

受入教員 田中淡教授

期間 八月十二日～九月十日

。金 海明 延世大学校文化大学教授

平安時代雅楽と唐詩の關係

受入教員 高田教授

期間 九月一日～

二〇〇六年八月三一日

。阿 風 中国社会科学院歴史研究所副
研究員

中国明清時代における法律・裁判文書
の研究

受入教員 岩井教授

期間 九月十二日～十二月十日

。PREGADIO, Fabrizio スタンフォー
ド大学宗教学部・代行助教授
道蔵輯要および内丹理論に関する研究

受入教員 麥谷教授

期間 十月十五日～

二〇〇六年二月十二日

。李 匡悌 中央研究院歴史語言研究所
副研究員

東アジアの環境と生業をめぐる人文情
報学的研究

受入教員 岡村教授

期間 十月十九日～十一月十八日

。陳 金華 カナダ・ブリティッシュコ
ロンビア大学助教授

唐代舍利信仰の研究

受入教員 船山助教授

期間 十月二十日～十二月五日

。WANG, Ding ベルリン・ブランド

ンブルク科学院非常勤研究員

中央アジア版刻史の研究

受入教員 高田教授

期間 十一月三日～

二〇〇六年十一月二日

。GUMBRECHT, Cordia ドイツ国
立図書館東アジア部主任

吐魯番探検隊の研究・ドイツ隊と大谷
隊

受入教員 高田教授

期間 十一月三日～

二〇〇六年十一月二日

。桑 兵 中山大学歴史系教授
二十世紀初の東アジアにおける人文情
報

受入教員 石川助教授

期間 十一月十日～十一月十九日

。LEE Pui Tak 香港大学アジア研究

センター助教授

アジア・ネットワークのなかの近代日
本・香港・上海の金融と関係して

受入教員 籠谷助教授

期間 十二月三日～

二〇〇六年三月二二日

。金 春實 忠北大学校人文大学教授

三国時代仏教彫刻の中国、日本との比
較研究

受入教員 曾布川教授

期間 二〇〇六年一月二十日～

二〇〇六年七月二十日

。朴 盛鍾 関東大学校人文大学メデ
ィア国文学科教授

室町時代の和製漢語と朝鮮王朝初期の
韓国漢字語との対比研究

受入教員 金教授

期間 二〇〇六年三月七日～

二〇〇六年八月二二日

外国人共同研究者

。梁 仁實

日本の視覚メディアにおける「朝鮮」
表象

受入教員 水野教授

期間 四月一日～

二〇〇六年三月三一日

。劉 思妙 中華仏学研究所助理研究員
インド中観派のチャンドラキールティ
による縁起思想

受入教員 船山助教授

期間 四月一日～

期間 七月十二日～八月十五日

。VOLKINSFELD, Sven ミュン

ター大学中国学研究所非常勤講師

Methodologies for computerized processing of classical Chinese texts

受入教員 ウィッテルン助教授

期間 九月十五日～十一月十五日

。鞏 文 中国社会科学院考古研究所助理研究員

三～六世紀の装身具からみた東アジアの文化交流

受入教員 岡村教授

期間 十二月十八日～

二〇〇六年三月一日

。PAUL, Paramita ライデン大学漢学研究所研修員

中国禅僧の肖像画

受入教員 富谷教授

期間 二〇〇六年二月一日～

二〇〇六年三月十五日

。SCHERRMANN Sylke Ulrike

青島旧蔵ドイツ語文献中の法制関係資料の調査

受入教員 岩井教授

期間 二〇〇六年二月二七日～

二〇〇六年三月三十一日

。許 芝銀 京畿大学校時間講師

江戸時代朝鮮通信使の研究

受入教員 金教授

期間 二〇〇六年三月一日～

二〇〇七年二月二八日

外国人研究生

。NAM, Paul Sangwoon

植民地期朝鮮における資本主義の展開

受入教員 水野教授

期間 四月一日～

二〇〇六年三月三十一日

。SOLOMON, Deborah

一九二九年光州学生運動の研究

受入教員 水野教授

期間 七月一日～

二〇〇六年六月三十日

。KEET, Philomena

衣服と遊ぶ 日本の若者ファッション現象であるコスプレに見る周縁性、創造力、アイデンティティ

受入教員 田中雅一教授

期間 十月一日～

二〇〇六年九月三十日

。ODA, Ernani Shouti

在日ブラジル人と他の移民・マイノリティとの関係に関する実証的研究

受入教員 竹沢教授

期間 十月一日～

二〇〇六年三月三十一日

。束 洪芬

中国北京にある家庭内暴力におけるジェンダー構造

受入教員 田中雅一教授

期間 十一月一日～

二〇〇六年三月三十一日

。廖 莉莉

儒学と現代人の行為の関連

受入教員 岩井教授

期間 十一月一日～

二〇〇六年三月三十一日

漢字情報研究センター講習会

。二〇〇五年度漢籍担当職員講習会（初級）

第二日（十月三日）

オリエンテーション 森 時彦

漢籍について

東京大学東洋文化研究所教授

大木 康

漢籍目録の構造―漢籍整理の基礎

文学研究科助教授 宇佐美文理

カードの取り方―漢籍整理の実践

山崎 岳

第二日(十月四日)

工具書について 藤井律之

漢籍目録カード作成実習

第三日(十月五日)

文字コードとテキスト処理の歴史

ウィッテルン、クリスティアン

目録検索とデータベース検索

安岡孝一

漢籍データベースについて

高田時雄

漢籍データ入力実習(一)

第四日(十月六日)

漢籍目録を読む

千葉大文学部助教授

古勝隆一

漢籍データ入力実習(二)

第五日(十月七日) NII総合目録データベースと全国

漢籍データベース

国立情報学研究所教授

宮澤 彰

実習解説

梶浦 晋

情報交換・質疑応答

富谷 至

。二〇〇五年度漢籍担当職員講習会(中級)

第一日(十一月七日)

オリエンテーション

森 時彦

四部分類概説

中国目録学史(一)

宮宅 潔

諸子百家から子部書へ

第二日(十一月八日)

中国目録学史(二)

中国の写本について

滋賀医大医学部助教授 辻 正博

叢書と漢籍データベース 安岡孝一

漢籍データ入力実習(一)

第三日(十一月九日)

中国目録学史(三)

朝鮮の漢籍について

漢籍データ入力実習(二)

第四日(十一月十日)

現代中国書について

横浜国大国際社会科学部研究科助教授

村上 衛

漢籍データ入力実習(三)

第五日(十一月十一日)

『東洋学文献類目』について

富山大学文学部助教授

実習解説

情報交換・質疑応答

お客さま

三月三十一日

ハーバード大学教授 杜

維明(森、麥谷、金、山崎が応対した)

五月十四日 中国科学技術大学校長 朱

清時教授(麥谷が応対した)

六月十日 香港「文匯報」元副社長 周

奕(森、石川、緒方が応対した)

七月四日 韓国学中央研究院教授 金

炳善他二五名(金、李が応対した)

十二月十日 清華大学人文社会科学学院

教授 汪 暉(金、石川、緒方が応

対した)

二〇〇六年一月十三日 忠南大学校社会

科学大学教授 金 弼東他十四名

(水野、李が応対した)

二〇〇六年二月十七日 フィンランドト

ウルク大学東アジア研究センター・

センター長 クラウス・ミュールハン

他一名(森、岩井、石川、緒方が応

対した)

対した)

二〇〇六年三月八日 中国科学院数学与

系统科学研究院教授 呉 文俊他二

名(武田が応対した)



この字、なんの字、気になる字。

井波陵一

月曜日の午前中、センターの入口の階段を上がりがら、ふと右手の応接室を見ると、あくまでも冴えない男たちが十人あまり、ゾロゾロ立っている姿が目に入り、訪れた人は一瞬ギョツとするらしい。よく見れば、ある者はテーブルにへばりつくように屈み込み、ある者は万策尽きたといった風情で天井を仰いでいる。そうかと思えば、指先で虚空を引っ掻いている者もいる——昨年四月にスタートした「北朝石刻の研究」班の、じつはありふれた光景である。

本研究班は「三国時代の出土文字資料」班において魏晋の石刻資料を読んだ部分を受け継ぎ、そのメンバーを基本としつつ、ただしより小規模な形で行われている。人文研所蔵の拓本をとにかく丁寧に眺めてみよう、という趣旨は前回と変わらない。拓本を拡げて一文字ずつ読み上げていく。あたかもローカル線の普通列車の車内放送のようなものだ。ただ車内放送よりはるかに厄介なのは、駅名が分からない、つまり文字

が読めない箇所再三出くわして立ち往生してしまうことである。かくて冒頭のような光景を呈することになる。文献資料に記された文字が本当に確認できるかどうか、またほとんど可能性が無いとはいえず、文献資料が未詳とする文字が本当に読めないかどうか、それこそ目を皿のようにして拓本を凝視し、あるいは頭の中で目に焼きついた痕跡を反芻し、果ては指先で何度もたどり直して、何とか解答を得ようとする。語注を作成することも大きな仕事であり、それも同時に進めているが、現段階では食らいつくように拓本と向き合うことに多大のエネルギーを費やしている。

人文研所蔵の拓本には漢籍と同じく、「最善」「最古」を誇り得るような絶品は多くない。いや、多くないという言い方にはかなり負け惜しみが入っているだろう。正直に言えば、ほとんど無い。これまでの経験では、北京図書館所蔵拓本でも見えない文字が見えたのは、魏の「受禪表」の内藤旧蔵拓本ぐらいではなかったか。釈読の際には北京図書館をはじめ他の機関が所蔵する拓本の写真を参考に行っているが、だいたいあちらさんにはかなわない。しかし、だからこそ「わが家の宝」には心にじわりと来るものがある。「わが家」は図書館でも博物館でもない。研究所なのだ。たとえそれが布切れを丸めてこしらえたボールの類であった

としても蹴り続ける。大切なのはボールそのものではない。それを蹴る醍醐味であり、そこから生まれる質の高いプレーなのだから。

アジア・ネットワークの研究

籠谷直人

○四年度から開始した共同研究は、もう一年継続することにした。一七世紀から現在までのアジアにおける広域市場秩序の存在を検討している。主権国家をつくりだすことが優先課題であった時代には、境界線の明確でない「地域」は各政治主体の利害の対立する場として描かれてきた。本研究では、そうした対立ではなく、むしろ「秩序」の場として捉えなおそうとしている。

なかでも、一九世紀の東アジア史について研究会ではおおいに議論されている。これまでこの時代について議論されてきたことは、「自由貿易」原則の強制と

いうヨーロッパの近代的帝国主義がもたらした「衝撃」と、それに対応する旧「帝国」の清朝中国と「鎖国」後期の徳川日本のあり方であった。その政治過程に注目するならば、清朝のアヘン戦争、アジア諸国の開港といった、近代への移行の断絶面であった。しかしヨーロッパで規範となった自由貿易原則が、アジアに浸透する過程そのものは、いまだ十分に明らかにされていない。日本近代史に即して考えれば、自由貿易原則は関税自主権という「主権の侵害」そのものであり、通史の対象はその主権の回復過程と、そうした制度に依拠して登場する経済主体に焦点が絞られた。あきらかに自由貿易は成長を阻む制度であった。しかし、近年の「アジア共同体」論の台頭のように、アジアにおける自由貿易体制の形成が広域な課題になるなかで、いかにして自由貿易原則は東アジアで根付いたのであろうかという関心も高まっている。そうした関心に歴史学はこたえているだろうか。

一八世紀からの中国では交易の拡大に寛容な貿易システムが導入されていたことが解明されつつある。清朝の広東システムといった厳しい管理貿易を「遅れた」ものと描く欧米の認識は、そうした貿易システムを批判する、または攻撃する言説を用意する。しかし、近年の清朝史はそうした欧米の認識から自由になりつ

つある（岩井茂樹、村上衛の各氏の議論）。西における主権国家システム―重商主義―自由貿易―帝国主義の時代変遷に対して、東には「倭寇的空間」―海禁・鎖国―（管理貿易）―互市システム―自由貿易の時代が存在したことになる。

自由貿易原則がそこから生まれ出るヨーロッパの東インド会社の「独占」の後退も、たんなる産業企業家の市場圏拡大の利害から説明されるものではないことがわかった。東アジアでの稼ぎを本国に送金する際に、東インド会社の送金方法はコストがかかった。むしろ東インド会社を一度も作らなかったアメリカ合衆国の商人がふりだす手形のほうが送金方法としては簡単であった（川村朋貴、西村雄志の各氏）。自由貿易は送金方法の競争と送金の中核であったロンドン・シテイの成長を背景にしていた。

そのほか、共同研究をとおして得られた知見はおおい。今年はその一部を論集『帝国の中のアジア・ネットワーク―長期の一九世紀』（京都）として世に問いたい。あわせて二〇世紀のアジア市場秩序を議論している。

「啓蒙」を求めて

田 中 祐理子

富永茂樹先生の主催する「啓蒙の運命」研究班に参加させていただき最初の一年がすぎた。研究班を準備する過程を見ることができたのは私にとって幸運だった。そこでは、「人文研で一八世紀の研究をする」ということのもたらしてくれる可能性が最大限に利用されていたように思う。贅沢に、というべきか。この方に参加していただけたらという、ほとんど夢にさえ近いような希望を、思い切っておつけることからこの共同研究は始まっている。そして現実に参加への承諾をいただいたとき、この人文研の建物の廊下を駆けて思わず歓声をあげながら、それを報告しあつたことが思い出される。人文研のスタッフの仕事とは夢を見ること、そしてその夢を臆面もなく実現しようとするのだ、と言ったらいすぎだろうか。それがいまではずいぶんと難しいことになりつつあるのはわかっているけれども、それでもこのような場があるのはおもしろい、そう班員の方に言っていたときには本当に

うれしかった。

もちろん夢の実現には大きな責任がともなう。そして個人的に振り返るなら、実際には「人文研で一八世紀の研究をする」ことの意味をわかっていなかった私は、この責任を果たすことは全くなかった。しかしひたすら「人文研にすること」によって、「一八世紀を学ぶこと」の重さと豊かさを目の当たりにする機会を与えられた。深く恥じいりながらも、人文研の助手というありかたのこの恩恵を思わずにはいられない（あるいは、このような図々しさもまた、人文研の助手がいつの間にか身につけてしまう財産なのだと嘯くことはゆるされるだろうか）。

そのような喜びと緊張で始まった本研究班は、昨年一年間、ときおり「これはペースとしては無茶なのは」という指摘も出る勢いで、二〇世紀における啓蒙研究の主要文献を読み続けてきた。

この作業を通じて目指されたことは二点あると言えるのかもしれない。書かれた言語も、著者の専門そして立場もさまざまに異なった文献を立て続けに読むことを通して、まず第一に、私たちは「啓蒙」という主題の遍在性と多様性を体感することとなった。このことは率直に「啓蒙を問う」という作業の現況を知ろうと努めるものであるとともに、これから私たちが「啓

蒙を問う」ためには必ず出会わなければならない、概念としての「啓蒙」のとらえがたさを確かめておくこともあっただろう。そしてこの多様性を前にしたときの班員の反応、それぞれが発する言葉ひとつひとつのぶつけ合いは、これもまた多様な専門と関心とに導かれてこれまで研究を進めてきた私たちが、各々に抱いている「啓蒙」なるものを浮かびあがらせるものであった。私たちは「いま・ここ」にある多様性、異質であること、ときには齟齬に直面しなければならなかったが、しかし逆にこれこそが今日においてもなお進行している「啓蒙」という主題の執拗さと切実さを私たちに教えたことは間違いない。この「準備作業」を共有することによって、私たちは「私たちの問題」としての「啓蒙」と「一八世紀」を論じ合うためのなんらかの平面を開こうと模索してきたのだろう。

実は、この共同作業の空間に浮かびあがってきた多様性について、それを呼ぶのに私は密かに「ボードレール問題」や「カント・サド反応」などといった勝手な言葉を呟くようになった。すべては試行錯誤のなかにあるが、一年かけてたてられた無数の測量標を、二年目にはいり私たちがどのように辿っていくことができるのか。研究班の課題は例えばそのようなものとなるだろうと考えている。

複雑系としての仏教漢文

船山 徹

共同研究班「真諦三藏とその時代」を始めてちょうど一年になる。真諦は六世紀の中頃に中国の南方各地を転々としたインド人僧侶。四大翻訳家の一人ともいわれる。この人物を軸に、インド文化と中国文化の思想的歴史的交渉を具体的に知ることをめざしている。

研究班で読んでいるのは、真諦自身の教説を弟子が書き残したものである。それはふつうの翻訳とは異なり、彼自身の考えを説いたものである。そのきわだった特徴のひとつに、中国文化圏の聞き手を初めから想定しつつインド人の立場から発言する点がある。中印文化の混淆的性格である。ただ、それがきれいな形で現存していれば、ことは単純明快だったのだろうが、現実には複雑を極める。弟子の書き残したものの自体が散佚し、現存しない。そのため、我々は後代の諸文献に引用される真諦の発言の断片をかき集めて読んでいる。そうした場合、錯綜した状況が生じるであろうことは容易に察しがつく。不確定要素が多く、引用は原文の

ままと考えてよいかといったあたりから検討をはじめねばならない。

佛典とりわけ翻訳調の文体も難物だ。抽象語が夥しく、ほとんど新造語ともいえるべき慣れぬ訳語すらあり、原語を想定せずには全く理解不能な場合もある。さらに音訳語がまるで当代日本語のカタカナのように多用される。そしてそれらが助字の用法にクセのあるなかば強引で機械的な四字句の連続を形成する。その結果、正統漢文の読み手には読むにたえないような、ゴツゴツとして晦渋な、しかし妙に迫力ある独特の文体ができあがる。

とりわけ真諦の場合は、解決のつかない一つの素朴な問題がある。我々が読んでいるものは文語としての仏教漢文なのであるが、では、インド人である真諦自身はいかなる言語で中国の弟子たちに語ったのか。インドの学術標準語としてのサンスクリット語か出身地ウッジャイニーの土着語のいずれかで話したことを、別人が漢語に通訳したのか。それとも最初から漢語で話したのか。もし後者なら、師のしゃべる口語の、恐らくはブローケン・チャイニーズを弟子たちが正規の文語表現に変換して筆記したのか、あるいは、我々が読んでいるのとは同様の文章が真諦の口から発せられたのか（この可能性はあまり高そうに思えないが）。

——弟子たちが残した真諦の伝記には「先生は漢語にきわめて堪能であり、通訳なしで何ら支障はありませんでした」とある。しかし賞讃の辞とその解釈はもちらん別問題だ。また伝記は真諦の不遇を論じ、かつて真諦が自殺を図ろうとしたことも記す。悟りにむかつて修行する僧侶の自殺行為をあからさまに記録する伝記はむしろ珍しい。

私はむかし学生のころ、サンスクリットを学び、文法的にきっちりわかる面白さや、印欧語としての論理性と明晰性に、わが日本語の対極にあるものを感じ、惹かれた。それから時は経ち、いつごろからか、種々の因子が絡み合った一筋縄ではゆかないような事柄に妙味を感じるようになった。かつての「すっきり分かる面白さ」から「分らない面白さ」へ。そして今、複雑系ともいえるべき漢文の、しかも仏教漢文という奇っ怪なるものに何かとつもない奥行きと謎を感じ、わくわくさせられている。その一つの典型が真諦にある。



つまらなかつたNHK 「新シルクロード」

富谷 至

昨年二〇〇五年からはぼ一年をかけて、NHKでは、日曜日にスペシャル番組「新シルクロード」を放映した。

高い人気をほこり、今でもあの喜多郎のテーマ音楽と共に記憶に残っている「シルクロード」が放映されたのは、もう四半世紀まえの、一九八〇年だった。一九七九年に西安に滞在していた私は、第一回目が西安だったこともあり、大変興味をもって見ていた。西安の西門から出発していくシーンをいまでもよく覚えており、また白龍堆をこえて楼蘭王国（LA遺跡）に辿り着き、水のないロプノールを映し出し、最後に臨場感をもってミイラを発掘するその演出効果に魅せられた。シルクロードって面白いなあ、というのが正直な感想であり、以後、スウェン・ヘーデン発掘文字資料にかんしてスウェーデンとの共同研究をおこなったのも、あのNHK「シルクロード」が与るところ少なくなかった。「NHKシルクロード」は、放映後、何種

類かの書物として出版され、またビデオも発売された。やがて、阪大の教養部に移った私は、しばしばそのビデオを教材に使って授業をおこなった。東洋史にはあまり興味の無い理系の学生を相手とした一般教養の授業には、「目で見るシルクロード」は、実に効果的であり、おかげで授業はやりやすかった。

一九八〇年の「シルクロード」は、専門家、とりわけ中央アジアを専門とする研究者には、あまり高い評価を得たものではなかった。いくつかの考証に誤りがあり、またことさらロマンを駆り立てるその構成は、シルクロードを研究するプロにとつては、成る程手放しで褒められるものではなかったことは、確かであろう。私もそれは認める。しかし、そういった瑕瑾はあっても、やはりあの特別番組は、他の番組とは比較にならないほどよくできたものだったと私は思う。億という制作費をかけたからであらうか。

そして半世紀後、「楼蘭王国」をその第一回目とした「新シルクロード」が始まったのである。しかし、それははつきり言つて、私には面白くない、詰まらない、退屈した、興ざめたものだったと言わざるをえない。何故だろう？

その一つは、四半世紀まえには、「残された最後の秘境」であったシルクロードの各地が、もはや秘境で

もなんでもない、その気になれば誰もが行ける地になってしまったからだろう。あの楼蘭とて、観光地となり、八〇年代の撮影隊が遭難しかけ、結局はたどり着けなかったダンダンウイリクも、別に今回の撮影隊がスタイン以後、初めて足を踏み入れた場所ではなくなっていた。初回のシルクロードのおかげで、秘境はなくなってしまったのだ。

第二点は、初回の企画は、それなりの調査、研究をふまえていた。このたびの企画は初回の物珍しさという効果が期待できないことからして、いっそうの製作努力をせねばならない。にもかかわらず研究、調査不足であり、それを小手先の演出で片づけようとした。たとえば、コンピュータでの再現、フィクション仕立てという。これが実に陳腐で、またいい加減なのだ。はぎ取られ、戦火で灰燼に帰した壁画をデジタル画像で再現する、古代楼蘭人（それが、いったいいつの時代のことを言っているのかすらはつきりしなかったが）がロブノールの地に農耕をおこなったこと、敦煌北窟の一人の僧侶、そしてシルクロード放映時に発見された遣唐使井真成、番組はそれらをいわばフィクションとして再現する。しかし、これらは、それほど深みのあるものではなく、見るものに感動をあたえない。少なくとも私には、さほど面白いものとは思わなかつ

た。とくに、フィクションは見えていて白けてしまった。「新シルクロード」は、とても授業にはつかえた代物ではない。

また何を視聴者に訴えようとしているのか、焦点がばけてしまっている。西部大開発なのか、地球温暖化なのか、シルクロードの歴史なのか、新出の考古遺物の発見なのか？ その何れもが中途半端で、見るものをして退屈させるのだ。

「企画・制作者は、もっとまじめに勉強すべきだ」、要はこの一言につきる。

小中学校教員を養成すること

岩 城 卓 二

前職場は大阪教育大学で、授業は日本史を中心に担当した。九年間の在職中に感じたのは、教員を目指す学生というのはいへん真面目な優等生たちだということである。たぶん親を困らせたこともなければ、学校や教員が好きであり続けたのであろう。

日本史好きの学生も多く、将来の授業に役立てよう
と真面目に聴講していた。世界史・地理・社会学・哲
学等々、卒論でいわゆる教科専門に相当する学問に取り
組む学生は少なくなかったが、それでも採用前の学
生たちの最大の関心事は、子どもたちと良好な関係を
構築するにはどうすれば良いかであった。もしくは子
どもたちが静かに、生き生きと聞いてくれるにはどう
教えれば良いのか、という教え方についてである。だ
から自主的に、強制的に、足繁く学校現場に通う。ま
たは子どもとふれあうことができる行事に参加する。

ところが教員採用後、学生たちを悩ませるのは子ど
も以上に、父兄である。連載をすいたくらいだが、運
動会での場所取りに犬を動員した父兄。合図のピスト
ルで二箇所同時に開門されるや、設営の努力を台無し
にする父兄の激走。そんなに努力した父兄が、良い場
所を確保できなかったと罵倒する母親。校庭にキャン
プ用バーベキューセットを持ち込み、仲良く昼食をす
る家族。たこ焼き・焼きそばといった屋台が繰り出す
小学校。授業参観での私語や携帯電話の着信音は当た
り前。一番驚かされたのは「○○君、こっち向いて」
と記念撮影をした母親がいたことである。もちろんす
べての学校がこんな具合ではないが、その根っこにあ
るのは学校や教員の軽視で、この風潮は日本中の公立

学校に共通することだと思う。さらに教員に敵意をも
っている父兄や、小馬鹿にしたような言動をする高学
歴の父兄も少なくないらしい。学校や教員が好きであ
り続けた若い教員たちには信じられないようなことば
かりで、ほんとうにいまの教員はたいへんだと思う。

そんな苦労をしている教員を敵に回すつもりなど毛
頭ないが、教育大学で深刻だと思ったことは教員の学
力低下である。子ども好きではあるが、知的好奇心を
欠如させた教員が多いと感じた。それは教員を目指す
学生でもある。ところがこうした私の認識とは違い、
学校現場ではとくにいまの若い教員は専門的な知が先
行しすぎだという意見が強いらしく、教え方を指導す
ることには大変に熱心である。もちろん教え方の向上
は不可欠ではあるが、専門的な知を持たない教員の授
業はやはりむなしく、言動に重みも感じられない。私
は学校や教員が軽視される理由のひとつはここにある
と思っている。当然のことだと思うのだが、教員には
教え方と専門的な知の双方が求められるのであって、
全教科を教える小学校教員も得意技といえる教科をも
つべきであろう。

とはいっても、いまの学校の現状を知れば知るほ
ど、優等生の学生たちが専門的な知の獲得よりも、子
どもや父兄とどのようにして良好な関係をつくるかに

関心が向くのは致し方ないと思っている。採用前に、教科の専門的な知が必要だといくら言っても実感がわかないのも当然なのであろう。しかしゼミ卒業生のうち何人かはだいたい三〜五年くらいで自分の専門知識の欠如に愕然とし、これでは授業ができないと口にしていった。採用後、比較的早いうちにこれに気が付く教員がたくさんいるとは思わないが、こうした教員が専門的な知を学ぶ場がほとんど用意されていないのも事実である。

採用前の養成は教員養成大学が責任を持たねばならないが、採用後の養成には広く社会全体が関わることでできるであろう。とくに教科の専門的な知を学ぶのはその必要性が実感できた採用後の方が適しているというのが、教員養成大学九年間で得た感触である。

ここ数年、都市部では小学校教員の大量採用が続き、やがて中学校教員の採用も増え始めるであろう。この大量採用される若い教員たちが、意欲や向上心を持続できるような場を提供することが必要であるし、一〇、二〇年後にも学校や教員の軽視が続いているのか否かの正念場がいまである。京都大学や人文研も教員採用後養成には関わることでできるのではなからうか。

学校や教員を軽視し、敵意を持つことは社会にとつてこの上なく不幸なことであろう。真面目な優等生た

ちである。みんなで育てていけば、それに応えるための努力は惜しまないという過剰な期待をいまでも持ち続けている。

晴れた日の朝には自転車で

王 寺 賢 太

晴れた日の朝には自転車で、私は下鴨の三角州を駆け抜けて行く。ある時には下鴨神社の本殿のそばから参道沿いの側道に入って、出町柳のほうからゆっくり歩いて来る参拝客とはちょうど逆向きに糾の森を突っ切って行く。原生林というには少し気がひけるが、人手の入ったことがないのは事実であるらしい広葉樹の繁みから朝日が差し込んで来る。その光が周囲に散乱するのを感じながら、ただひたすら無心に自転車を漕いで行く。夏には緑色に染まる光線が、晩秋に深々と色づいた紅葉を透かして森の中の地面のそここに赤い影を落とす時には、ふと足を止めてそれに見入ってしまったもいいだろう。またある時には出雲路橋から

賀茂川のほとりに出て、川沿いに堰堤を駆けて行く。人家の立ち並ぶ通りを抜けるといきなり、広々とした高い空と街の外郭の山々の連なりに縁取られたのどかな風景が開ける。冬枯れの貧寒とした岸辺が一気にはなやいで、春になれば桜、菜の花、青草に次々に彩られるその風景の真ん中を、まっすぐに貫いて走って行く。空には鳩、鴉、あるいは鳶。雨の後で流れが激しくなつてさえないなければ、水面には白鷺や鴨の親子。「かもがわ」という名のこの川に実際に鴨が泳いでいるのを目にすることになるとは、少し前までの私は想像することさえなかったのだが。

人文研に到着して一年有余、自宅から研究所までの「自転車通学」は、すっかり私の日常となつてしまった。糾の森にしても、賀茂川の堰堤にしても、とりたてて大きな空間ではない。そこを自転車で駆け抜けて行くのも、せいぜい五分程のことにすぎないだろう。しかしそのつかの間の経験は、いつもかすかな驚きとささやかな喜びを私に与えてくれる。地方都市とは言え百五十万もの人が住む京都の街の中に、穿たれた穴のように残された自然。人々によつて飼ひ馴らされてしまったわけでもなく、かといって人間を圧倒するでもない、あくまでも穏やかなその広がり、と絶え間のない変化。とは言えその穏やかさは、包み込んでくるよ

うな優しさであるよりも、むしろ親密さも敵意も欠いた無関心のようなものだ。その穏やかな無関心の中を通り過ぎるたび、私は不意に、ほとんど懐かしさとも言いたいような感情にとらわれる。

幼少を過ごした九州では時々近くの山や川に出かけて遊んではいたが、所詮は工業都市の子にすぎないし、物心がついてからは九州から東京へ、東京からフランスへ、そしてそれぞれの土地であちからこちらへと引越しばかり繰り返してきた私が、下鴨の森や川のほとりで突然懐かしさらしき感情に目覚めるというのもいささか滑稽な話ではある。しかし長年の外国生活の後、京都で家庭を持ち、大学に職を得ることになつた私が、自宅から職場への行路の途上に開けたささやかな自然の中で、何がしかの感慨に襲われるというのも理由のないことではなさそうだ。それを自然と呼ぶとしても、そこで問題になっているのはあれこれの場所や風景ではなくて、むしろ自分自身を取り巻く関係の網の目の中に開いたある種の空隙なのかもしれない。そして、そこでとらわれる感慨を懐かしさと呼ぶとしても、それはもはや過ぎ去つてしまった過去への感傷とは似て非なるもので、むしろさまざま関係の手前にいまだつねに居残り続けている私自身と、つまり何者でもない誰かと、再び遭遇する時に覚える感情なの

かもしれない。

明日の朝もまた、天気さえ良ければ、私は自転車で下鴨の三角州を走り抜けて行く。行き違う周囲の風景に目を楽しませ、風と光を突き抜けて。ただ、不用意にペダルを漕ぐ足を止めてしまわないように気をつけながら。

二〇〇三年春 北京にて

古 松 崇 志

二〇〇三年三月三〇日、わたしは初めての在外研究のために北京へと出発したが、かの地では、新型肺炎 S A R S の流行がすでに始まっていた。四月に入ると、感染力の強い肺炎は爆発的に広がっていったが、中国政府は恐慌を避けるべく、二〇日まで一貫して事実を隠蔽しつづけた。だがこの間、多くの北京市民は携帯メールやインターネット掲示板などを通じて、北京で異常な事態が進行しつつあることを知り始めていた。同時に情報は錯綜し、さまざまなデマも流れた。S A

R S 感染を抑えるために、北京を封鎖するという話がまことしやかに語られ、スーパーなどで人々が食料品を競って買い求めるパニックも目の当たりにした。感染を防ぐためのマスクが飛ぶように売れ、街の店頭からはマスクが消えた。このときこの国の新聞・テレビなどの報道機関が、まったくもって政府に統制されていることを改めて実感させられたが、同時に、都市部での携帯やインターネットの普及によって、中国政府が旧来型メディアを通じて情報を完全にコントロールすることはもはや不可能な時代となったことも知った。二〇日の政府記者発表を境に、感染抑制の措置が採られ始め、至る所で消毒液の臭いが立ちこめるようになった。公共施設は閉鎖され、多くの会社も休みになり、完全に非常事態に入った。人々は家にこもるようになり、走っているバスはがらがらで、閉店に追い込まれるレストランもあった。

文献調査をする予定だったいくつかの図書館はみな閉鎖になってしまったし、フィールド調査旅行を行ううえにも鉄道などに乗って北京を出ることを禁じられてしまったから、まったく仕事にならないということで、やむを得ず五月初旬に一時帰国することにした。日本に戻ると、各マスコミが、これ見よがしな中国批判もあいまって、S A R S についてセンセーショナルな報

道をこぞって行っていた。そして報道の多くは決して SARS という疫病についての正確な情報を伝えることを目的とするものではなく、大衆の興味を引き、恐怖をおもわせるものであった。SARS について多くの日本人の人々は無知であった。五月に起きた京都・大阪での台湾人旅行者をめぐる騒動はマスメディアの無責任と大衆の無知をさらけ出した事件であった。数日前に感染疑いのある旅行者の通った場所はみな徹底消毒が行われ、風評被害で誰も来なくなり大損害を被ったのである。そうした報道の結果か、中国からやって来た人間に対してはある種の差別、偏見のごときものも広がっていったし、わたしたち自身直接に味わったこともあった。

家族で初めて過ごした外国生活は SARS 騒動の渦中に身を置くという衝撃的なものとなったが、日中国のメディアや社会がかかえるそれぞれ異なる問題を、身をもって考えさせられる機会を得たことは、今となってはよい経験だったと思うている。

〈人文科学協会奨励賞〉

奨励賞を受けて

原 田 禹 雄

沖縄との出会いは、派遣医として出張した一九六七年のことであった。はじめて見る沖縄の風物と人物の素晴らしさにうたれたが、この時に見た又吉静枝さんの「諸屯」という女手踊りの静かさと華麗さに魅了された。

四度派遣された沖縄の日々の印象が、忘れることができなかった私は、琉球関係の本を買い集め、診療の余暇に勉強を始めた。『中山伝信録』が、多くの書に引用されているので、その訳注書を探したが、生硬な読み下しのほかにはなかった。京大図書館の『伝信録』のコピーを、自分のために、ひとりこつこつと訳注をした。中国文学専攻の兄に校閲してもらったところ、兄の口ききで、東京から出版された。一九八二年のことであった。次に、京大東洋史の李鼎元の『使琉球記』を訳注し、一九八五年に東京から刊行された。訳注書を読むことを願いながら、それがなかったために、訳注者になってしまった。

一九九二年に定年を迎え、私は京都の自宅へもどり、思う存分、冊封使録の訳注に没頭した。そこへ、宜野湾の榕樹書林の武石社長から、冊封使録の訳注書を出版したい、という依頼があった。かくて、年に一、二冊の割で、私の書いたものが、本になっていった。本業の古書店の時は黒字だったが、私の本を出す頃から人々が本を読まなくなったこともあり、赤字経営となった。本の性質上、当用漢字だけですむはずもなく、編集担当の国書サービスの割田さんは、とうとう旧漢字とそれに近いものすべてを、印字し作字する体制を印刷所の中に作りあげてくれた。

私の訳注書は、沖縄からは、ほとんど反応はなかった。県立芸術大学教授の又吉静枝さんは、私の使録を読み、『伝信録』に書かれているのに、すでに廃絶していた入子踊の復元をされた。私の作業が、琉球芸能のお役に立っていたのである。

奨励賞のことをきき、琉球のことを、そして門外漢の私の訳注のことを、人文研の方で見守っていて下さったことがわかり、うれしかった。看護学校で、私が始めて皮膚科を授業した、奄美出身の卒業生たちが、今回の受賞をよろこんでくれて、こんな手紙が来た。

「医学の領域で、そして琉球に関する領域で、先生が努力を続けて来られたことは、私達の誇りで

す。先生がお書きになった本は、シマンチュ（島人）の宝です」。



書いたもの一覧

(氏名五十音順)

●は単行本

浅原 達郎

厄について——戎肆庵読装記之五—— 曰古 四号

四月

読郭店楚墓竹簡札記序 曰古 五号

三月

林已奈夫先生と共同研究班 曰古 五号

三月

李 昇 燦

三・一運動期における朝鮮在住日本人社会の対応と動向 人文学報 九二号

十二月(奥付は二〇〇五年三月)

池田 巧

●21世紀後半の言語はどうなるのか(共著) 明石書店 九月

「第2回西夏学国際学術研討会」参加記 漢字と文化 六号

十一月

石川 禎 浩

●初期コミンテルンと東アジアに関する歴史文献学的研究(編著)

科研究費成果報告書 四月

思い出せない苦悩——中国共産党の記念日 人文 五二二号

六月

翻訳・楊棟梁「卓越せる学識 崇高なる人格——江口圭一先生逝去一周年を記念して」 追悼文集刊行会編『追悼 江口圭一』

人文書院 九月

追悼 江口圭一

二十世紀初年中国留日学生“黄帝”之再造 清史研究 四期

早期共産国際大会的中国代表 上海革命史資料与研究 五輯

中共二大与中共党史研究史 上海革命史資料与研究 五輯

死後の孫文——遺書と記念週(講演要旨) 史林 八九卷一

号 中国共産党成立史 中国社会科学出版社

国際ワークショップ「近代東アジアの情報——質と量」 漢字と文化 七号

プリンスストン高等研究所の東洋学(上) 漢字と情報 十二号

關於中国共産党第二次代表大会 中共党史資料 九七輯

稲葉 穰

クラス河畔の戦い クタイバ・ブン・ムスリム 『週刊シルクロード紀行』一〇号

仏像の時代 カニシカ王 『週刊シルクロード紀行』一六号

アレクサンドロス大王の足跡 チャールズ・マッソン 『週刊シルクロード紀行』一〇号

朝日新聞社 十二月

朝日新聞社 一月

朝日新聞社 二月

朝日新聞社 三月

朝日新聞社 四月

朝日新聞社 五月

朝日新聞社 六月

朝日新聞社 七月

朝日新聞社 八月

朝日新聞社 九月

朝日新聞社 十月

朝日新聞社 十一月

朝日新聞社 十二月

刊シルクロード紀行」一七号 朝日新聞社 二月

The Identity of the Turkish Rulers to the South of Hindukush from the 7th to the 9th Centuries A. D. Zinbun 38. 三月

三月

The Survival of Buddhism in the Eastern Part of Khurasan on the Eve of Islamic Conquest. Hamid FAHIMI & Riko TSUCHIHASHI (eds.) *Report of the Iran-Japan Joint Research on the Diffusion of Buddhism in Iran*. ICAR. Archaeological Institute of Kashihara & Research Center for Silk Roadology. 三月

●南西アジアスラム伝播ルートと初伝 伝説の基礎的研究 (科研費研究成果報告書) 三月

ムスリム侵入時のフェルガーナ 堀川徹編『中央アジアにおけるムスリム・コミュニティの成立と変容に関する歴史学的研究』(科研費研究成果報告書) 三月

岩 城 卓 二

書評：久留島浩『近世幕領の行政と組合村』歴史学研究 八〇〇号 四月

書評：町田哲『近世和泉の地域社会構造』市大日本史 八号 五月

ウィッテルン クリスティアン

From Text to Information — Small Steps towards a Knowledgebase of Tang Civilization. 日中共同シンポジ

ウム「漢字文献資料庫の技術」報告書 七月

The Text in the Age of Digital Reproduction. The Role of Buddhism in the 21st Century. *Proceedings of the Fourth Chung-Hwa International Conference on Buddhism* 十一月

宇佐美 齊

作家の恋文を読む (13) — (24) NHKラジオ・フランス語講座 四月—三月

大岡昇平と中原中也 中原中也の会会報 八月

偽作のはなし 日文研叢書『表現における越境と混淆』(井波律子・井上章一共編) 九月

フランス語になった中原中也の詩 流域 五十六号 九月

白熱の現在を生きる詩人 ichiko ランボー特集 十月

日仏文化交渉の研究 日本歴史 一月

仏訳中原中也詩集をめぐって ふらんす 二月

●Arthur Rimbaud à l'aube d'un nouveau siècle: actes/colloque, Kyoto / dir. Hitoshi Usami; préf. Pierre Brunel. Klincksieck. 三月

王 寺 賢 太

日本語に「大人」の作法を——「啓蒙」再考と他者への配慮 京都新聞 九月二十日

書評：ヨーロッパ近代——歴史とその限界 福井憲彦著『ヨーロッパ近代の社会史』ふらんす八〇／一一 十一月

書評・文学の正統性 大西巨人著『縮図・インコ道理教』
週刊読書人 十一月二十五日号

翻訳・セルゲイ・カルプ『『岡インド史』の十八世紀ロシアにおける翻訳——『中国人についての政治的考察』を例として——』中川久定／ヨヘン・シュローバハ編著『十八世紀における他者のイメージ』河合文化教育研究所

三月

翻訳・ハンス・ユルゲン・リューゼブリンク『批評家と歴史家としての翻訳者——『岡インド史』ドイツ語翻訳における中国と日本の表象について——』前掲中川／シュローバハ編著所収 河合文化教育研究所

三月

Histoire et Droit dans l'Histoire des deux Indes de Raynal / Diderot. Zinbun 38

三月

大浦 康介

ポルノの身体とは何か——表象理論と身体 菊地曉編『身体論のすすめ』 丸善 四月

岡村 秀典

画文帯神獸鏡 綾部山三九号墓 御津町教育委員会 三月

●国家形成の比較研究（共編）

学生社 五月

雲岡石窟出土遺物の研究（共著） 日本考古学協会第七一回

総会研究発表要旨

五月

雲岡石窟の出土品 人文 五二二号

六月

夏王朝の成立 泊園（関西大学泊園記念会） 四四号

十月

書評・曹瑋著『周原遺址与西周銅器研究』 東方 二九六号

十月

雲気禽獸紋鏡の研究 考古論集（川越哲志先生退官記念論文集） 週刊シルクロード紀行 五号 十一月

王権が開いた「玉の道」 朝日新聞社 十一月

中国・朝鮮半島と弥生文化 ドイツ展記念概説・日本の考古学 上巻 学生社 十二月

前漢鏡の宇宙 鏡の中の宇宙 山口県立萩美術館・浦上記念館 十二月

三角縁神獸鏡の成立 鏡の中の宇宙 山口県立萩美術館・浦上記念館 十二月

●雲岡石窟 遺物篇（編著）

朋友書店 二月

籠谷 直人

戦間期のアジア綿業 経営史学会編『外国経営史の基礎知識』 有斐閣 四月

The Chinese Merchant Community in Kobe and the Development of the Japanese Cotton Industry, 1890-1941, in Kaoru Sugihara(ed.), Japan, China and the Growth of the Asian International Economy, 1850-1949, Harvard University Press 二〇〇五年三月

日本綿業における在華紡の歴史的意義 森時彦編『在華紡と中国社会』 京都大学出版会 十一月

加藤 和人

What Should Scientists Do Outside the Laboratory? Lessons on Science Communication from the Japanese Genome Research Project (伊東真知子氏と共著), *Genomics, Society and Policy*, Vol.1, No.2 二〇〇五年八月
The Ethical and Political Discussions on Stem Cell Research in Japan, in W. Bender, C. Hauskeller, and A. Manzei, eds. *CROSSING BORDERS: Cultural, religious and political differences concerning stem cell research—a global approach*, Agenda Verlag.

二〇〇五年九月

A haplotype map of the human genome (The International HapMap Consortium と共同共著で発表), *Nature*, Vol.437, No. 7063 二〇〇五年十月
ゲノムひろば—双方向の科学コミュニケーションをめざして『蛋白質・核酸・酵素』 共立出版 二〇〇五年十二月

菊 地 暁

●身体論のすすめ (編著)

丸善 四月

「京都的」学問風土の今昔 京都新聞 八月二十九日朝刊
主な登場人物——京都で柳田国男と民俗学を考えてみる——
柳田国男研究論集 四号 十二月

金 文 京

『事林廣記』の編者、陳元靓について 汲古 四七号

汲古書院 六月

中国の宗教的仮面劇の現状と問題点——能との類似性について 能と狂言 三号 ペリカン社 六月

三国志演義版本挙隅 中国古代小説研究 一輯

人民文学出版社 (北京) 六月

試論日韓両国翻訳中国典籍の方法 東亜伝世漢籍文献訳解方

法初探 台湾大学出版中心 六月

書評：野口鐵郎・田中文雄「道教の神々と祭り」東方宗教

一〇六号 日本道教学会 十一月

東アジアの異類論争文学 文学 六卷六号

岩波書店 十一月

座談会：東アジア漢文文化圏を読み直す 同右 十一月

漢兒言語考「韓国的中国言語学資料研究」

学古房 (ソウル) 十一月

Eclipse of Time and Seasons in Dongjueyuan Xiangji, MEMOIRS OF THE RESEARCH DEPARTMENT OF THE TOYO BUNKO, No. 63, THE TOYO BUNKO (TOKYO) 十二月

久保 昭 博

《Destinée》de Raymond Queneau: De l'importance des sciences et de la poésie dans sa formation littéraire. *Les Amis de Valentin Brû* 38/39. 六月

小関 隆

『ワードマップ イスラーム』

新曜社 三月

一九世紀末のアイランド問題とプリムローズ・リーグ・ホーム・ルール反対はいかにアピールされたか? 人文科学報 九二号 十二月(奥付は三月)

明るく、賢く、若々しく…「人気の指導者」にみる労働者クラブという集団 佐藤清隆・中島俊克・安川隆司(編)『西洋史の新地平…エスニシティ・自然・社会運動』

刀水書房 十二月

コラム…歴史叙述・史料・記憶 佐藤清隆・中島俊克・安川隆司(編)『西洋史の新地平…エスニシティ・自然・社会運動』

刀水書房 十二月

書評…若尾祐司・羽賀祥二(編)『記録と記憶の比較文化史』歴史学研究 八二二号

三月

事典の項目…アイランド合同 猪口孝・田中明彦ほか(編)『国際政治事典』

弘文堂 十二月

小牧 幸代

痛み・悼み・祈る…宗教と身体 菊地暁編『身体論のすすめ』

丸善 四月

●北インド・ムスリム社会におけるサイヤドの人類学的研究 東京外国語大学大学院博士論文

一月

生と死…アザンからナマーズ・ジャナザまで 小杉泰・江川ひかり編『ワードマップ イスラーム』

新曜社 三月

ヴェール…ブルカは「女性蔑視」か 小杉泰・江川ひかり編

齋藤 智寛

王弼の見た『老子』 中嶋先生退休記念事業会編『中国の思想世界』

イズミヤ出版 三月

坂本 優一郎

一八世紀ロンドン貿易商の家族史——ファン・ネック家の事例にみる文化の境界と社会的結合—— 人文科学報 九一号

九月(奥付は〇四年十二月)

商業資本主義、産業資本主義、ジェントルマン資本主義、世界資本主義、コモンウェルス 猪口孝他編『国際政治事典』

九月(奥付は〇四年十二月)

弘文堂 十一月

佐野 誠子

道仏宗教者の出生の不思議——あるいは神話と伝記 麥谷邦夫編『三教交渉論叢』

弘文堂 十一月

中国の祭日と死者を巡る物語り 人文 五二号

六月

志怪中所見的天和神 葛曉音編『漢魏晋南北朝文学与宗教』

九月

『宋書』「五行志」と志怪書 桃の会論集 三集

十月

曾布川 寛

●中国 美の十字路展・図録(共編)

大広 七月

●中国美術の図像と様式 中央公論美術出版 二月

●中国美術の図像学(編) 京都大学人文科学研究所 三月

中国出土のソグド石刻画像試論 中国美術の図像学 京都大学人文科学研究所 三月

高井 たかね

黄巾の乱／孔子／高祖(漢)／高僧伝／公孫氏／皇帝／光武帝／吳越／胡樂／後漢書／五經／五經正義／五台山巡礼／五代十国／崑崙山／左氏伝／冊府元龜／三階教／三国志／三省六部／史記／資治通鑑／貞觀政要／女真／徐福伝説／識緯説／新修本草／晋書／隋／隋書／西王母／釈奠／切韻／宋錢 上田正昭監修『日本古代史大辞典』

大和書房 一月

最後の野帳 人文 五二号 六月

高木 博志

明治維新と天皇——天皇制の身体 菊地曉編『身体論のすずめ』 丸善 四月

古都京都イメージの近代 京都新聞 七月六日

記念祭の時代——旧藩と古都の顕彰 明治維新期の政治文化 思文閣出版 九月

茨木キリシタン遺物の発見 新修茨木市史年報 十一月

The Meiji Restoration and the Revival of Ancient Culture Perspectives on Social Memory in Japan, Global Oriental Ltd, UK, edited by Tsu Yun Hui 十二月

近代文書解題 京都府古文書調査報告書第十四集 賀茂別雷

神社文書目録

京都府教育委員会(奥付は二〇〇三年三月) 三月

高階 絵里加

日本で裸体を描く——美術と身体—— 菊地曉編『身体論のすずめ』 丸善 四月

この世にないもの・神秘・無限 村上華岳に通う近代詩の空 氣 京都新聞 五月七日

新緑と絵画 幸福な調和 「万緑の大山崎山荘」展

黒田清輝「アトリエ」 美術館を楽しむ Z.O.S. 鹿児島市 朝日新聞社 六月

立美術館 色彩と筆致で語りかける 「ゴッホ展」 日本経済新聞(夕刊) 六月十六日

創造の神秘と魔術実感「ギュスターヴ・モロー展」 日本経済新聞(夕刊) 七月十四日

竹内栖鳳「江南春寺静」 美術館を楽しむ Z.O.S. 足立美術館 朝日新聞社 八月

絵画の革新と広がり実感「ルーヴル美術館展」 日本経済新聞(夕刊) 八月二五日

明治期の《オルフォイス》 舞台背景と山本芳翠 森鷗外訳オペラ「オルフェウス」全三幕・グルック作曲(プログラム) 東京藝術大学 九月十八日

激しい自然、迫る実在感「クールベ美術館展」

日本経済新聞(夕刊) 九月二二日

『黒田清輝の岡倉天心像——《智・感・情》の主題と成立をめぐる——』『美術史論壇』第20号 韓国美術研究所(韓国語)

日本独自の西洋画を模索 「日本近代洋画への道展」 二〇〇五年上半期

日本経済新聞(夕刊) 十月二七日

画家の息遣い、デッサンに「ベオグラード国立美術館蔵フランス近代絵画展」 日本経済新聞(夕刊) 十二月八日

収集家の審美眼に驚嘆「ブーシキン美術館展」

日本経済新聞(夕刊) 一月二五日

日本の美意識、生き生きと「花鳥風月の変貌」展

日本経済新聞(夕刊) 三月八日

高田 時雄

日本中文古籍データベースの最新動向 國家圖書館館訊 九四年二期(総號一〇四期)

●敦煌・民族・語言 北京・中華書局 十二月

東アジア世界の人文情報学研究教育拠点 日本歴史 六九二 一月

号

武田 時昌

江戸初期和算書の情報源 東洋文化 八五号

二〇〇五年三月

蚕神伝説の思想的背景 科研費成果報告書『六朝隋唐精神史の研究』

二〇〇五年三月

江戸の珠算文化とその情報源 Chubu Institute for

Advanced Studies Studies Forum Series 33

二〇〇五年三月

人文研アーカイブス(一〇) 佐藤一斎旧蔵『明儒学案』漢字と情報 九号

二〇〇五年三月

本邦残存典籍による輯佚資料データベース 漢字と情報 十号

十月

●韓国科学技術史 技術的伝統の再照明(宮島一彦氏との校訂、全相運著、許東榮訳) 日本評論社 十月

集中講義と二つの輯佚書 『中村璋八先生叢書記念文集』

汲古書院 一月

汲古書院 一月

田中 淡

関野貞の中国建筑史学 『関野貞アジア踏査・平等院・法隆寺から高句麗古墳壁画まで』(東京大学コレクションXX)

東京大学総合研究博物館 六月

黄泉の暮らしと住まい——明器陶屋の世界『陶器が語る来世の理想郷 中国古代の暮らしと夢——建築・人・動物』(町田市立博物館図録第二二八集)

十一月

田中 雅一

多民族社会における宗教——シンガポールのヒンドゥー教をめぐる—— 人文学報 九二号

二〇〇五年三月

変態する身体 モダン・プリミティブのゆくえ M・ダグラス『禁忌と汚穢』 山下晋司編『文化人類学 古典と現代

ス』

二〇〇五年三月

二〇〇五年三月

Cultural Situation Violence and a Possibility of Intercultural Ethics: A Case of Disputes over *sati* (widow burning) in Contemporary India. In Kuhngardt, Ludger and Mamoru Takayama (eds). *Menschenrechte, Kulturen und Gewalt: Ansätze einer interkulturellen Ethik*, Nomos. 六月

Commentary on Frantz Martin Winner's Human Rights and Intercultural Ethics. In Kuhngardt, Ludger and Mamoru Takayama (eds). *Menschenrechte, Kulturen und Gewalt: Ansätze einer interkulturellen Ethik*, Nomos. 六月

「スリランカ」「スリランカ紛争」猪口ほか編『国際政治事典』弘文堂 十二月

Hindu Priests under Secular Government: A Case Study of the Nataraja Temple at Chidambaram, South India. In *The State in India: Past and Present*, ed. by Masaaki Kimura and Akio Tanabe. Oxford University Press: New Delhi. 2005 十二月

Toward an Anthropology of Agency: Performativity and Community Japanese Review of Cultural Anthropology 6 二月

旅が照射する沖縄戦——二つのオキナワ・バトルサイト・ツアーをめぐる——西井涼子・田辺繁治編『社会空間の人類学——マテリアリティ・主体・モダニティ』世界思想社

田中 祐理子
「血液循環の発見」とは何か——近代医学の身体観 菊地暁編『身体論のすすめ』丸善 四月

六〇年代と身体未来——「現代医学」の約束と隘路 富永茂樹編『一九六〇年代の研究——生活文化と意識における変容の国際比較』科研費成果報告書 五月

田 辺 明 生

The System of Entitlements in Eighteenth-Century Khurda, Orissa: Reconsideration of 'Caste' and 'Community' in Late Pre-Colonial India. *South Asia* 28(3). 十一月

● *The State in India: Past and Present* (co-edited with Masaaki KIMURA), New Delhi, Oxford University Press, Introduced and contributed a chapter "Early Modernity and Colonial Transformation: Rethinking the Role of the King in Eighteenth and Nineteenth Century Orissa". 一月

Democracy and Development in Agrarian India: An Anthropological Reflection on Rural Political Economy. NAGASAKI Nobuko (ed.), *Democracy and Development in South Asia: East Asian Comparative Perspectives*. Ryukoku University. 二月

谷川 穰

教室で座るということ——学校と身体—— 菊地暁編『身体論のすすめ』 丸善 四月

新刊紹介・福島榮寿『思想史としての「精神主義」』日本史研究 五一二号 四月

周旋・建白・軫宗——佐田介石の政治行動と「近代仏教」—— 明治維新史学会編『明治維新と文化』

説教の位相——筑摩県における教導職—— 吉川弘文館 八月
治維新期の政治文化—— 思文閣出版 九月

一年有半?——共同研究「明治維新期の社会と情報」のあとで—— 鴨東通信 五九号 十月

僧侶・教員兼務論に関する一考察——明治前期を中心に—— 教育史学会第四九回大会発表要綱集録 十月

富永茂樹

京都芸術センター五年のあゆみ『京都芸術センター五周年記念誌』 京都芸術センター 四月

《マクルーハン》とはなんであったか——一九六〇年代と知の展開—— 科学研究費成果報告書『一九六〇年代の研究』 五月

《De Brissot à Tocqueville: Amérique, la Révolution et la démocratie》, *La France et les Etats-Unis deux modèles de démocratie: Acte du Colloque international commémoratif du bicentenaire de la naissance d'Alexis de*

Tocqueville, Maison Franco-Japonaise de Tokyo 六月

インタビュアー…アートの器#6 Diastix 十六号 九月
インタビュアー…オルガナイザー河野健一・森口邦彦 松本茂

章『芸術創造拠点と自治体文化政策』 水曜社 一月
無題（はじめて伊砂先生のアトリエに……） コンサートⅡ

展覧会「音とかたちの出会い——伊砂利彦とドビュッシーをめぐって」チラシ 京都芸術センター 二月

二〇〇五年読書アンケート みすず 五三五号 二月

富谷 至

●（韓国語版）木簡竹簡の語る中国古代

書評…福井重雅『漢代儒教の史的研究』 東洋史研究 六月
卷一号 四六

よくわかる中国史（連載） 週刊中国悠遊紀行 二八〇五〇
小学館 四月・九月

江陵張家山247号墓出土竹簡——とくに「二年律令」に関して 木簡研究 二七 十一月

●教科書では読めない中国史 江陵張家山漢墓出土「二年律令」訳注稿 その（三） 小学館 三月

学報 七八冊 三月

永田知之

オントロジーな日々 漢字と文化 六号 十一月
中国古典学知識ベースにおける信頼性評価モデルの一試案

(共著) 東洋学へのコンピュータ利用 第一七回研究セミナー
三月

京都新聞 一二月一六日
インタビュアー…再生産される「生命空間」談 七五号

中西裕樹

ヒル(水蛭)の地図 岩田礼編『方言地図とその解釈(一)』
科研費成果報告書 金沢大学文学部 三月

犂と剣——ナチスの技術崇拜 経済史研究 九号 三月

藤井正人

Documenting the Present Jainimya Traditions and Manuscripts. (共著) 科研費成果報告書『現存ヴェーダ伝承の調査と研究』 五月

船山 徹
真諦三蔵の著作の特徴——中印文化交渉の例として 関西大学東西学術研究所紀要 三八輯 四月
体用小考 科研報告書『六朝精神史の研究』(研究代表者宇佐美文理)

A Catalogue of the Manuscripts of the Jainimya Samaveda traced and photographed in 2002-2004. (共著) 科研費成果報告書『現存ヴェーダ伝承の調査と研究』 五月

Perception, Conceptual Construction and Yogic Cognition According to Kamalasila's Epistemology. 中華佛学学报 十八期 七月

藤原辰史

耕す体のリズムとノイズ 菊地暁編『身体論のすすめ』

聖者観の二系統——六朝隋唐仏教史鳥瞰の一試論 麥谷邦夫編『三教交渉論叢』 京都大学人文科学研究所
インドのことを漢文に——仏典漢訳史の立場から 創文 四八〇号 十月

丸善 四月

牛乳神話の形成——一九六〇年代の食文化 富永茂樹編『一九六〇年代の研究——生活文化と意識における変容の国際比較』 科研費成果報告書 五月

古松 崇志
考古・石刻資料よりみた契丹(遼)の仏教 日本史研究 二二号 二月

インタビュアー…有機農業と戦争

慶州白塔建立の謎をさぐる——11世紀契丹皇太后が奉納した仏教文物——『遼文化・遼寧省調査報告書 二〇〇六』 京都大学大学院文学研究科 三月

インタビュアー…ナチス流有機農法 実態に迫る
京都大学新聞 一〇月一六日

水野 直樹

日韓歴史資料の共有化を——歴史認識における「和解」のため
に 世界 七四一号 七月
史料紹介・解題・座談会「在日朝鮮人問題に就て」(一九四八年) 世界人権問題研究センター 研究紀要 一〇号

朝鮮独立運動を援助した弁護士・布施辰治「国民」からの「在日」排除を批判 三月
毎日新聞(大阪本社版) 八月十九日夕刊

中野重治と金斗鎔——「きくわん車の問題」、植民地支配への賠償、そして天皇制—— 情況 三期六卷八号 十月
座談会・歴史の視点から日韓関係を問う直す『コリアNG Oセンター News Letter』Vol.6

日朝の関係史から見た日本の歴史——植民地支配とは何だったのか——『人権・環境・平和ニュース ひーと』(「基本法」三重) 七九号・八〇号 九月・十一月
現在から過去へ、そして未来へ——「北関大捷碑」と日韓の歴史認識—— 神奈川大学評論 五二号 十二月

守岡 知彦

Character Processing Based on Character Ontology 日中共同シンポジウム「漢字文献資料庫の新技術」京都大学 21世紀COEプログラム「東アジア世界の人文情報学研究教育拠点」 七月
階層的素性名を用いた異体字記述の試み(共著) 情処研報

Vol. 2005, No. 76

漢字処理 中国21 Vol.23 十二月
CHISE 漢字構造情報データベース 東洋学へのコンピュータ利用 第17回研究セミナー 三月

宮 紀子

幻の『全室薬』 漢字と情報 十一号 十月
徽州文書にのこる衍聖公の命令書 史林 八八巻六号

●『モンゴル時代の出版文化』

名古屋大学出版会 十一月

宮 宅 潔

「二年律令」研究の射程——新出法制史料と前漢文帝期研究の現状—— 史林 八九巻一号 一月
有期労役刑体系の形成——「二年律令」に見える漢初の労役刑を手がかりにして—— 東方学報 七八冊 三月
江陵張家山漢墓出土「二年律令」詁注稿 その(三)(共著) 東方学報 七八冊 三月

森 時彦

武進織布業的近代化過程『近代中国与世界』 社会科学文献出版社 一月
●在華紡と中国社会(編著) 京都大学学術出版会 十一月
一九二七年九月上海在華紡の生産シフト『在華紡と中国社会』 十一月

在華紡の進出と高陽織布業『在華紡と中国社会』 十一月

矢木 毅 朝鮮の写本と俗字 漢字と情報 十一月 十月

安岡 孝一 QWERTY 配列再考 情報管理 四八巻一号 五月

透明テキスト付き画像とその応用 第六八回圖書系職員勉強会 八月

Adobe-Japan1-6のUnicode 異体字処理と文字コードの現実 情報管理 四八巻八号 十一月

共建敦煌学知識庫時需要遵守的幾点建議 敦煌学知識庫国際学術研討会論文集 十一月

文字符号の歴史——欧米と日本編—— 共立出版 二月

JIS漢字案（一九七六）とJIS C 6226-1978の異同 東洋学へのコンピュータ利用 第17回研究セミナー 三月

山室 信一 アジアの平和——その思想的基底 ノモス 関西大学法学研究 一五号 二〇〇四年十二月

文化相渉活動としての軍事調査と植民地経営 人文学報 九号 二〇〇四年十二月

明治儒学存在形態及其意義 劉岳兵・主編『明治儒学と近代日本』 上海古籍出版社 四月

インターネット…戦後処理の再考 朝日新聞 四月一四日

日中関係の未来のために 熊本日新聞 五月二日
対談…いじらしい日本と『東洋』 藤井青銅『東洋一の本』 小学館 五月

東アジアにおける言論状況 ハンギョレ新聞 韓国 六月

日露戦争の世紀——連鎖視点から見る日本と世界 岩波新書 九五八 七月

六カ国協議と憲法問題 ハンギョレ新聞 韓国 七月

ナショナリズムと外交姿勢 ハンギョレ新聞 韓国 八月

インターネット…信頼醸成と立法府の責任 朝日新聞 八月二八日

メディア・クラシーの時代と政治的狂騒 ハンギョレ新聞 九月

慰霊と政治的責任 ハンギョレ新聞 韓国 十月

歴史の傷跡、それゆえの希望 ハンギョレ新聞 韓国 十一月

Manchuria Under Japanese Dominion: Encounters with Asia, Translated by Joshua A. Fogel, Pennsylvania University Press 一月

井上毅の国際認識と外交への寄与 國學院大學日本文化研究所編『井上毅と梧桐文庫』 汲古書院 二月

東アジアの流動性とながら——思想連鎖と文化連関の視点から 国分良成編『世界のなかの東アジア』 慶應義塾大学出版会 三月

横山 俊夫

『紅萌』第7号(企画、共編、編集後記)

京都大学総務部広報課 三月(前号記載漏れのため)

ケンブリッジ大学環境研究推進組織 Cambridge Environmental Initiative 訪問記録(大窪健之氏と共編)

私家版 四月

The Illustrated Household Encyclopedias that Once Civilized Japan. S. Formanek and S. Linhart, eds, *Written Texts — Visual Texts, woodblock printed mass media in early modern Japan*, Amsterdam: Hotei, 2005 五月
京都大学国際交流推進機構(和英両文)「大学国際戦略本部強化事業」採択大学機構概要 日本学術振興会宛提出、同会ホームページ掲載 七月

Keynote Speech, *Book of Abstract, 11th International Conference of the European Association for Japanese Studies*, August 31 - Sept 3, 2005 University of Vienna 八月

あやをなす作法——京ことばと文明『交響する身体——ひと・もの・自然を考える——』(京都大学シニアキャンパス二〇〇五講義ノート) 京都大学 九月
いざなひ『東寺・高松伸 こころの建築展』(図録巻頭挿込) 高松伸建築設計事務所 十月

京都文化会議二〇〇四 地球化時代のこころを求めて(会議参加者冊子/共編) 京都文化会議組織委員会 十月
京都大学国際戦略(共同執筆) 日本学術振興会宛提出、同会

ホームページ掲載

十二月

● *Sansui, An Environmental Journal for the Global Community*, No. 1 (inaugural issue), Tracey Gannon and Toshio Yokoyama, General Editors, Sansai Gakurin, Kyoto University Graduate School of Global Environmental Studies 一月

Even a sardine's head becomes holy: the role of household encyclopedias in sustaining civilisation in pre-industrial Japan, 同刊 *Sansui*, No. 1 掲載 一月

Fostering a Renaissance in Kyoto, *Raku-Yu, Kyoto University Newsletter*, No. 9, Spring 2006 Issue, Public Relations Division, Kyoto University 三月

Research Innovation in Language- and History-conscious Milieu — Kyoto University as a case study, APRU SSM, Beijing University, 8-10 March; circulated at the International Academic Exchange Committee No. 286 of Kyoto University 三月

『京都大学大学院 地球環境学舎 三才学林年報 平成16年度』(共同執筆) 京都大学大学院地球環境学舎 三月

一三〇〇年へ向けて(再録)『伝統と創生——協会ニュースで振りかえる20年』 財団法人平安建都千二百年紀年協会 三月

● 嶋臺塾記録(共編)第一号

京都大学大学院地球環境学舎 三月

●難波鉦 梅之部抄（共編）人文科学研究所共同研究「文明

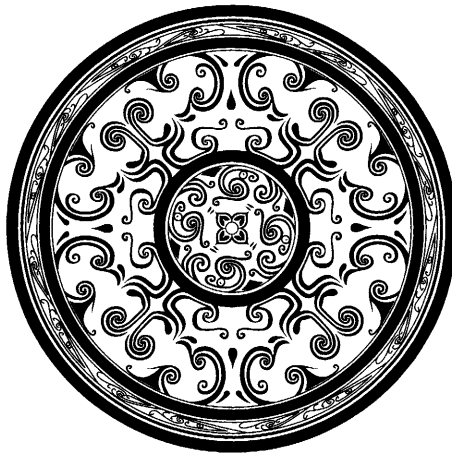
と言語」報告拾遺 京都大学人文科学研究所 三月

●京都文化会議二〇〇五——地球化時代のこころを求めて 報告書（共同企画・共編）京都文化会議組織委員会 三月

●*Kyoto International Culture Forum 2005—In Quest of Kokoro/Human Minds for This Planet* (jointly planned and edited) Kyoto International Culture Form Organizing Committee 三月

開会挨拶『二〇〇五年度京都大学大学院教育学研究科国際シンポジウム事業報告書』

京都大学大学院教育学研究科 三月



人

文

第五三号

二〇〇六年六月三十日

京都大学人文科学研究所発行

共同印刷工業

非売品